て、眞に理財に長ずる人は、よく集むると同時によく散ずるやうでなくてはならぬ、よく散ずるといふ意味は、正當に支出するのであつて、卽ちこれを善用することである、良醫が大手術を用ゐて患者の一命を救つた「メス」も、狂人に持たしめると人を傷る道具となる、また老母の孝養に必要なる飴も、賊徒に與ふれば樞の開閉に音なきの盜具となる故に、我々は金を貴んで善用することを忘れてはならない、實に金は貴ぶべく又賤しむべし、之をして貴ぶべきものたらしむるのは、偏へに所有者の人格によるのである、然るに世には貴ぶといふことを曲解して、只無暗にこれを吝む人がある、眞に注意せねばならぬことである、金に對して戒むべきは濫費であると同時に、注意すべきは吝嗇である、能く集むるを知りて能く散ずることを知らねば、その極守錢奴となるから、今日の青年は濫費者とならざらんことを勉むると同時に、守錢奴とならぬやうに注意せねばならぬのである。

理想と迷信

◎道理ある希望を持て

戰爭して負けては困るが、唯國力を擧げて戰爭にのみ奔るといふことは王道に適するものでは無い、今日の時局に對して我々は左樣な事まで心配せぬでも宜い譯であるが、是から先きの商工業は如何にしたら宜からうか、平和が克復したら其後の實業界は如何なるかといふやうな事に就ては、意想外なる變化を生じて、仲には惡いと思つたことが善くなり、善いと思ふたことが惡くもならうから、今日から臆斷は出來ない、併し人は未來の事に向つて是非とも理想は持つべきものであるから、假令違却するとも一定の主義に依て行ふといふやうなことが無け

れば爲らぬ、詰り能く思ひ審かに考へて事に當れば、必ず過は尠いものである

戰爭の如き事變の勃發には、曾て想像したものに違却を生ずることはあるが、凡そ人の世に處するには、相當の趣味と理想とを以て道理から割出して進むのが必要であると思ふ、只その間に謂ゆる商業の德義は如何しても立て通すやうにして最も重要なるは信である、此の信の一字を守ることが出來なかつたならば、我々實業界の基礎は鞏固といふことは出來ないのである、約言すれば、時局の平和となつた曉には、別して我々實業に從事する者の責任が重くなるのであらうと思ふ、獨り責任が重いのみならず、諸君が經營せらるゝ事業に就ても、是が如何になるかといふ事を豫想して、その豫想から十分なる道理を考定して、是に由つて活動せらるゝやうにありたいと考へる、『道理ある希望を持つて活潑に働く國民』といふ評語は概括的な言葉であるが、先頃或亞米利加人が我が同胞を評して、日本人

の全體を觀察すると、各人皆希望を以て活潑に勉强する國民であると言はれて、私は大に悅びました、私も斯く老衰しては居るが、向後益々國家の進運を希望として居る、また多數の人々の幸福を增すことを希望として居る、實業家諸君も亦同樣であらうと思ふ、時局の有無に關はらず、苟くも實業に從事するものは斯くありたい、將來は斯うしなければならぬと云ふ希望は誰もあるに相違ない。

況んや斯る大戰に際しては、將來どう變化するだらうかといふ豫想は、最も眞思熟慮を要することゝ思ふ、その經營せらるゝ事業に應じて宜しきを制して行くといふことは必要だらうと思ふが、之を處するに就て是非一つ守らなければならぬことは、前にも述べた商業道德である、約すれば信の一字である、是が御同樣實業者に健全に行はれて往つたならば、私は日本の實業界の富は更に增大して、同時に人格も大に進むであらうと思ふ、單に時局に就てのみ希望する譯ではない

が、斯る時機は別して變化が多いことを豫想すると、お互に負擔して居る職分から考へたら、宜しきを制することが出來るであらうと思ふのである。

◎この熱誠を要す

如何なる仕事に對しても、近頃の流行語に趣味を持たねば不可ぬといひますが此の趣味といふ語の定義がどの邊にあるか、學者でないから完全なる解釋を下すことは出來ないが、人が職掌を盡すといふにも、此の趣味を持つといふことを深く希望する、趣味といふ字は理想とも聞えるし、慾望とも聞えるし、或は好み樂しむといふやうな意味にも聞える、故に此の趣味といふ字を約めて解釋したならば、單に其の職分を表面通りに勤めて往くと言ふのは、俗にいふ御極まり通りで、只その命令に從つて之を處して行くのである、併し趣味を持つて事物を處す

るといふのは、我心から持出して、此の仕事は斯くして見たい、斯うやつて見たい、斯うなつたから、是を斯うやつたならば、斯くなるであらうと云ふやうに、種々の理想慾望をそこに加へてやつて行く、其れが始めて趣味を持つたといふこと、即ち趣味といふのは其邊にあると、私は理解する、趣味の定義はどうであるか知らぬが、是非人は其の掌ることに就て、總て此の趣味を持たれたいと思ふ、更に一歩進んで、人として生れたならば、人たる趣味を持つて盡したいと思ふ、果して此世に一人前の趣味を持つて、其の趣味が眞正に向上して往つたら、其れこそ相應の功德が世の中に現はれ得るであらう、それまでに無くとも、趣味ある行動であつたならば、必ず其の仕事に就て精神あることであらうと思ふ、若し其のお極まり通りの仕事に從ふのであつたら、生命の存在したものでなくて、たゞ形の存したものになる、或る書物の養生法に、若し老衰して生命が存在して居つ

ても、唯だ食うて、寢て、其の日を送るだけの人であつたならば、それは生命の存在では無くして、肉塊の存在である、故に人は老衰して、身體は十分に利かぬでも、心を以て世に立つ者であつたら、即ちそれは生命の存在であるといふ言葉があつた、人間は生命の存在たり得たい、肉塊の存在たり得たくないと思ふ、これは私共頽齡のものは、始終それを心掛けねばならぬ、まだあの人は生きて居るか知らんと云はれるのは、蓋し肉塊の存在である、若しさういふ人が多數あつたならば、此の日本は汚き〳〵はせぬこ思ふ、今日世間に名高い人で、まだ生きて居るかと言はれる人が澤山ある、是は即ち肉塊の存在である、故に事業を處するにも其通り、唯だ其の務めるだけでなく、其事に對して趣味を持たなければ不可ぬ、若し趣味がないなら精神がなくなつて了ふ、恰度木偶人こ同樣になる、斯の如き譯であるから、何事でも自己の掌ることに深い趣味を以て盡しさへすれば、

自分の思ふ通りに總てが行かぬまでも、心から生ずる理想若くは慾望の或る一部に適合し得らるゝものと思ふ、孔子の言に『之を知る者は之を好む者に如かず、之を好む者は之を樂む者に如かず』とある、蓋し之は趣味の極致と考へる、自分の職掌に對しては必ず此の熱誠がなくてはならぬのである。

◎道德は進化すべきか

道德といふものは、他の理學化學のやうに、段々進化して行くものであるか、詰り道德は文明に從つて進化すべきものであるかと云ふのである、一寸了解し難い言葉であるが、前にも言ふ如く、宗教信念を以て道德を堅固にするが宜いか、さなくこも論理の上から德義心は維持出來るものであるこ云ふやうに、追々其の解釋が進化し來りはせぬか、蓋し道德といふ文字は、支那古代の唐虞の世より、

王者の道といふのが卽ち道德の語原である、故に道德といふ文字は餘程古い。

進化は生物のみでは無い、若しもダーヴヰン氏の說に據りて、古いものは自然に進化すべしと言はゞ、科學の發明、生物の進化に伴つて、追々に變更するといふことになつて然るべき譯ではないか、但し進化論は多く生物に就て說明したやうであるけれども、研究を重ねて往つたならば、生物でなくても追々推移變更するものではないか、變るといふよりは寧ろ進み行く有樣がありはせぬか、何時頃の敎であるか知らぬが、支那で唱へる二十四孝は、種々なる孝行の例を二十四擧げてある、其の中に最も笑ふべきは郭巨といふ人が、其の身貧にして親を養ふ資財なく、爲めに吾が兒を生埋にしやうと思つて土を掘つたら釜が出た、其の釜の中に多くの黃金があつたので、吾が兒を生埋にせずとも親を養ふことが出來た、卽ち孝の德であると云うて居る、若し今の世の中で、親孝行の爲めに我が兒を生

埋にすると云ふたならば、馬鹿な事をする、困つたものだと人が評するに相違ない、卽ち孝の一事にしても、世の進步に伴れて人の毀譽が異ると云つても宜いと思ふ、更に一の例を云へば、王祥が親を養ひたい爲に、鯉魚を捕ふるとて、裸體になつて氷の上に寢て居つたら、鯉が飛出したといふことがある、是は戲作かも知らぬが、若し事實としたならば、如何に孝道なればとて、其の心の神に感通する前に身體が凍死したならば、却つて孝道に反するであらう。

想ふに二十四孝の敎旨の如きは、假設のものにて的例にはなり難きも、善事といふことに就ては、見方が世の進步と共に色々に變るといふことがありませぬか若し或る物質に就て考へたら、卽ち電氣もなく蒸氣も無かつた時のことを今日から回想して、殆んど並べ較べにならぬやうになる、故に道德といふものも左樣にまで變化するものであれば、昔の道德といふものは餘りに尊重すべき價値は無く

なるが、併し今日理化學が如何に進歩して、物質的の智識が增進して行くにもせよ、仁義とか云ふものは、獨り東洋人が左樣に觀念して居る許りではなく、西洋でも數千年前からの學者、若くは聖賢とも稱すべき人々の所論が、餘り變化をして居らぬやうに見える、果して然らば古聖賢の說いた道德といふものは、科學の進歩に依て事物の變化する如くに變化すべきものでは無からうと思ふのである。

◎斯の如き矛盾を根絕すべし

强い者の申分は何時も善くなると云ふことは、一つの諺として佛國に傳はつて居るけれども。漸々文明が進めば、人々道理を重んずる心も、平和を愛する情も增して來る、相爭ふ所の慘虐を嫌ふ念も、文明が進めば進む程强くなる、換言すれば、戰爭の價値は世が進むほど不廉となる、何れの國でも自ら其所に顧みる所

があつて、極端なる爭亂は自然に減ずるであらう、又必ず減ずべきものと思ふ、明治三十七八年頃、露西亞のグルームこかいふ人が、『戰爭と經濟』といふ書を著作して、戰爭は世の進むほど慘虐が强くなる、費用が多くなるから、遂には無くなるであらう、といふ說を公にしたことがある、曾て露西亞皇帝が平和會議を主張されたのも、是等の人の說に據つたものであると、誰やらの說に見たことがある、夫程に戰爭の慘虐なものであるといふ事が唱へらるゝ位だから、今度の如き全歐洲の大戰亂なぞは、決して起るべきもので無いやうに思はれて居つたが、丁度昨年(大正三年)の七月末に日々各新聞紙の報導を見た頃、私は兩三日旅行して、如何なるかといふ人の問に答へて、新聞紙で一見すれば戰爭が起ると信ぜらるるが、先年亞米利加のジョルダン博士が「モロッコ」問題の生じた時に、米國に有名なる財政家ゼー・ビー・モルガン氏の忠言の爲に戰爭が止んだといふことを、

電報でいつて來たと言うて、—博士は素より平和論者であるから、平和に重きを措いたのであらうが—特に手紙を寄越したことがある、私も其說を深く信じた譯では無かつたけれども、世の進歩の度が增すに隨つて人々が能く考慮するから、戰亂は自然と減ずるといふ道理が起つて來る譯で、それは自然の勢ひと思はれると申したことであつた。

然るに今日歐羅巴の戰爭の有樣は、細かに承知はしないが、實に慘澹たる有樣である、殊に獨逸の行動の如きは、謂ゆる文明なるものは何れにあるか分らぬと云ふやうな次第である、蓋し其の根源は、道德といふものが國際間に遍ねく通ずることが出來ないで、遂に是に至つたものと思ふ、果して然らば凡そ國たるものは斯る考を以てのみ、其の國家を捍衛して行かねばならぬものであるが、何とか國際の道德を歸一せしめて、謂ゆる弱肉强食といふことは、國際間に通ずべか

らざるものとなさしむる工夫が無いものであらうか、畢竟政治を執る人、及び國民一般の觀念が、相共に自己の勝手我儘を增長するといふ慾心が無かつたならば此の如き慘虐を生ぜしむることは無からうけれども、一方が退歩すると他方が遠慮なく進歩して來るやうでは、此方も進まなければならぬから、勢ひ相爭ふやうになり、結局戰爭せねばならぬことになる、殊更その間に人種關係もあり、國境關係もありませうから、或る一國が他の一國に對して勢力を張るのは其意を得ない、之を止めるには平和では不可ぬといふので、遂に相爭ふやうになるのである蓋し己の欲する所を人に施さないのであつて、たゞ我を慕り慾を恣にし、强い者が無理の申分を押通すといふのが今日の有樣である。

一體文明とは如何なる意義のものであるか、要するに今日の世界は尙だ文明の足らないのであると思ふ、斯く考へると、私は今日の世界に介在して將來我が國

家を如何なる風に進行すべきか、又我々は如何に覺悟して宜いか、已む事を得ずば其の渦中に入つて弱肉強食を主張するより外の道はないか、是非これに處する一定の主義を考定して、一般の國民と共に之に據りて行くやうにしたいと思ふ我々は飽くまでも己れの欲せざる所は人にも施さずして、東洋流の道德を進め、彌增しに平和を繼續して、各國の幸福を進めて行きたいと思ふ、少くとも他國に甚しく迷惑を與へない程度に於て、自國の隆興を計るといふ道がないものであるか、若し國民全體の希望に依つて、自我のみ主張する事を止め、單に國內の道德のみならず、國際間に於て眞の王道を行ふといふ事を思ふたならば、今日の慘害を免れしめることが出來やうと信ずる。

◎人生觀の兩面

人は此の世に生れた以上、必ず何等かの目的がなくては叶はぬことだが、其の目的とは果して何事であるか、如何にして遂げ得べきか、これは人の面貌の異れるが如く、各自意見を異にして居るであらうが、恐らくは次の如く考ふる人もあるであらう、それは自己の長じたる手腕にせよ、技倆にせよ、それを十分に發揮して力の限りを盡し、以て君父に忠孝を致し、或は社會を救濟しようと心懸ける併し其れも漠然と心で思ふだけでは何にもならぬ、矢張り何等か形式に現はして爲なければならぬので、茲に己の修め得たる材能に依賴して、各自の學問なり、技術なりを盡すやうにする、例へば、學者ならば學者としての本分を盡し、宗教家ならば宗教家としての職責を完うし、政治家も其の責任を明かにし、軍人も其の任務を果すといふやうに、各自に其の能力の有らん限りを傾けて之に心を入れる、斯の如き場合に於ける其の人々の心情を察するに、寧ろ自己の爲といふより

は君父の爲め、社會の爲といふ觀念といふ方が勝つて居る、即ち君父や社會を主とし、自己のことをば賓と心得て居るので、余は之をしも客觀的人生觀とは名くるのである。

然るに前陳のやうなことは全く反對に、唯々簡單に自分一人のことばかり考へ社會のことや他人のことなぞ考へない者もあるであらう、併し此人の考の如く社會を觀察すれば、矢張り其所に理窟がないでもない、即ち自己は自己の爲に生れたものである、他人の爲や社會の爲に自己を犧牲にすることは怪しからぬではないか、自己の爲に生れた自己なら、何所までも自己の爲に計るが可いとの主張から、社會に起る諸事件に對し、出來得る限り自己に利益になるやうにばかりして行く、例へば、借金は自分の爲に自分がしたのだから、是は當然拂ふべき義務があるから拂ふ、租稅も自分が生存しつゝある國家の費用だから、當然に上納する

村費も亦左樣であるが、此上他人を救ふ爲に、或は公共事業の爲に義捐するといふやうな責任は負はない、それは他人のため社會の爲にはなるであらうが、自分の爲にならぬからだとなし、何でも自己の爲に社會を經營させようとする即ち自己を主として他人や社會をば賓と心得、自己の本能を滿足せしめ、自我を主張するを以て能事終れりとする、余は此の如きものを名けて主觀的人生觀とは言ふのである。

余は今是等二者の中、事實に於て如何と考ふるに、若し後者の如き主義を以て押し通すときは、國家社會は自ら粗野となり、鄙陋となり、終には救ふべからざる衰頽になりはすまいか、それに反して前者の如き主義で擴充してゆけば、國家社會は必ず理想的のものとなつてゆくに相違ない、故に余は客觀的に與して主觀的をば排斥するのである。孔子の敎に『仁者は己れ立たんと欲して先づ人を立

て、己れ達せんと欲して先づ人を達す』と曰うてあるが、社會のこと人生のことは總て斯うなくては爲らぬことゝ思ふ、己れ立たんと欲して先づ人を立てといひ己れ達せんと欲して先づ人を達すといへば、如何にも交換的の言葉のやうに聞えて、自慾を充たさう爲に、先づ自ら忍んで人に讓るのだといふやうな意味にも取れるが、孔子の眞意は決してそんな卑屈なもので無かつたに違ひない、人を立て達せしめて、然る後に自己が立ち達せんとするは、其の働きを示したもので、君子人の行の順序は此くあるべきものだと教へられたに過ぎぬのである、換言すれば、それが孔子の處世上の覺悟であるが、余も亦人生の意義は此くあるべき筈だと思ふ。

◎これは果して絶望か

私共の組織して居る歸一協會といふのがある、歸一といふのは外でもない、世界の各種の宗教的觀念、信仰等は、遂に一に歸する期のないものであらうか、神といひ、佛といひ、耶蘇といひ、人間の履むべき道理を說くものである、東洋哲學でも西洋哲學でも、自然些細な事物の差はあるけれども、その歸趣は一途のやうに思はれる、『言忠信、行篤敬なれば、蠻狛と雖も行はれん』といひ、反對に『言忠信ならず、行篤敬ならざれば、州里と雖も行はれんや』と云つて居るのはこれは千古の格言である、若し人に忠信を缺き行が篤敬でなかつたならば、親戚故舊たりとも其人を嫌がるに違ひない、西洋の道德も矢張り同じやうな意味のことを說いて居る、但だ西洋の流義は積極に說き、東洋の流義は幾分か消極に說いてある、例へば、孔子敎では、『己の欲せざる所、人に施す勿れ』と說いてあるのに、耶蘇の方では『己の欲する所、これを人に施せ』と、反對に說いてあるやう

なもので、幾分かの相違はあるけれども、悪いことをするな、善いことをせよと云ふ、言ひ現はし方の差異で、一方は右から說き、一方は左から說き、而して歸する所は一である、斯樣に程合のもので、深く研究を進めるならば、各々宗派を分ち、門戸を異にして、甚しきは相凌ぐといふやうなことは、實は馬鹿らしい事であらうと考へる、凡てに於て歸一が出來るか否かは判らぬけれども、或る程度の歸一を期し得るものなれば、左樣あらしめたいといふ考へで、組織せられたのが即ち歸一協會である。

組織以來最早數年を經過して居る、之が會員は日本人ばかりでなく、歐米人も多少は居て、而して或る問題に就てお互に研究し合つて居る、私は卽ち仁義道德と生產殖利といふことは、一致すべきものであり、一致させたいものであることに就て、自分は四十年來その事を唱道し實踐して居る、併しながら道理は左樣で

あるけれども、之に反する事實が屢次世間に現はれるのは、眞に情ない次第である。

自分の說に對して平和協會のボール氏とか、井上博士、鹽澤博士、中島力藏博士、菊地大麓男などは、全然歸一とまでは行かないにしても、必ず或る程度までは歸一し得らるべきものである、世の中の物事が、時としては橫道に外れるやうなこともあるが、其れはその事物が惡いので、その爲に眞理は少しも晦まされるものでは無い、昔は斯うであつたとか、斯ういふ理論もあるとか曰はれて、仁義道德を生產殖利とは必ず一致すべきもの、又一致せなければ眞正の富を造り成し之を永久に捕捉することの出來ないものであると云ふことは、大抵の議論が歸著しようと思ふと言つて居られる、若し果して斯ういふ論旨が十分に徹底して、世の中に鼓吹せられ、生產殖利は必ず仁義道德に依らねばならぬ、と言ふ觀念が打

成されたならば、仁義道德に缺ける行爲は自ら止むに至るであらう、例へば、御用物品の買上に從ふ職司の人も、賄賂は仁義道德に背くと心付けば、迚も賄賂を收め得るものでない、御用商人の側から云うても、仁義道德に背戻すると思へば賄賂を行うことは出來まい。

此の關係を押し進めて政治にせよ、法律にせよ、軍事にせよ、有らゆる事柄を此の仁義道德に一致させなければ不可ない、一方は仁義道德に從つて正しき商賣の道を履んでも、一方が賄賂を要請するといふやうな片足では不可ない、世の中のことは殆んど車を廻すやうなもので、お互に仁義道德を守つて行かなければ、必ず何所か扞格を生ずるのであるから、一切の事柄をして仁義道德に合致せしむるやう相互に努めなければならぬ、此の主義を十分に擴大して廣く社會に行ふならば、賄賂などといふやうな、忌はしいことは自ら止むに至るであらう。

◎日新なるを要す

社會の事柄は年を逐うて進んで來るやうにも見える、また學問も內からと外からと、次第々々に新しいものを齎らして來る、社會は日に月に進歩するには相違ないが、世間のことは久しくすると、その間に弊を生じ、長は短となり、利は害となるを免れぬ、特に因襲が久しければ、潑溂の氣がなくなる、故に古人も曰つた、支那の湯の盤の銘に『苟日新、日日新、又日新』とある、何でもないことだが、日々に新にして又日に新なりは面白い、總て形式に流れると精神が乏しくなる、何でも日に新の心懸が肝要である。

政治界に於ける今日の遲滯は、繁縟に流れるからのことである、官吏が形式的に、事柄の眞相に立ち入らずして、例へば、自分にあてがはれた仕事を機械的に

處分するを以て滿足して居る、イヤ官吏ばかりでない、民間の會社や銀行にも、此の風が吹き荒んで來つゝあるやうに思ふ、一體形式的に流れるのは、新興國の元氣鬱勃たる所には少いもので、長い間、風習がつゞいた古國に多いものである幕府の倒れたのは其の理由からであつた、『滅二六國一者六國也、非レ秦也』と曰つてある、幕府を滅したるは幕府の外なかつた、大風が吹いても強い木は倒れぬ。

自分は宗教觀念を今でも持たぬが、併し其れかゝ言つて外道で守る所がないと云ふのではない、私は儒教を信仰して、是を言行の規矩として居る、『獲二罪於天一無レ所レ禱』である、私一人は其れで可いが、一般民衆は爾うは行かぬ、智識の程度の低い者には、矢張り宗教がなければならぬ、所が今日の狀態は、天下の人心歸一する所なく、宗教も亦形式となつて、お茶の流派流儀と云つたやうな憾がある、民衆に嚮ふべき所を教へぬ、是は何とかせねばなるまい。

此の狀態に對して善い施設をせねばならぬと思ふ、今日は迷信などが中々盛んであつて、そのお蔭で田を流したの、倉をなくしたのといふものが多い、宗教家が本當に力を入れて起たなければ夫等の勢は益々盛んになるばかりであらう、西洋人は言ふ、『信念强ければ、道德は必要なし』と、その信念を持たせねばならぬ。

商賣は己を利することを眼目とする爲に、自分さへ利すれば其れで可い、他人の迷惑は知らぬ存せぬといふ考を持つて居る人がある、それ故に利殖と道德とは一致せぬといふ人もあるが、これは間違ひで、そんな古い考は今の世に通用させてはならぬ、維新頃までは、社會の上流、士大夫ともいふべき人は利殖に關係しないで、人格の低いものが之に當るといふのであつた、その後此の風習は改まつたが、まだ餘喘を保つて居る。

孟子は、利殖と仁義道徳とは一致するものであると曰つた、其後の學者が此の兩者を引き離して了つた、仁義をなせば富貴に遠く、富貴なれば仁義に遠かるものとして了つた、町人は素町人と呼びて賤められ、士の倶に齡ひすべきものでないとせられ、商人も卑屈に流れ、儲け主義一天張りとなつた、是が爲に經濟界の進歩は幾十年幾百年遲れたか分らぬ、今日は漸次消滅しつゝあるが、まだ不足である、利殖と仁義の道とは一致するものであることを知らせたい、私は論語と十露盤とを以て指導して居る積りである。

◎修驗者の失敗

余が十五歳の時であつた、自分には一人の姉が腦を患つて發狂し、二十歳といふ娘盛りでありながら、婦人にあるまじき暴言暴行を敢てし、狂態が甚だ強かつ

たので、兩親も余も之を非常に心配した、兎に角女のことであるから、他の男に其の世話はさせられぬ、余は心狂へる姉の後ろに附隨して歩き、樣々に惡口されながらも、心よりの心配に驅られて能く世話をしてやつたので、その頃近所の人人の褒め者であつた、然るに此の心配は獨り一家内の上ばかりでなく、親戚の人人も等しく憂慮して呉れたが、中にも父の實家なる宗助の母親は大の迷信家であつたので、此の病氣は家に祟のある爲であるかも知れぬから、祈禱するが宜いと頻りに勸誘したけれども、父は迷信が大嫌ひで、容易に聞入れなかつたが、その中に姉を伴れて轉地保養かたゞ上野の室田といふ所へ行かれた、此の室田といふ所は有名の大瀧がある所で、病人を其の瀧に打たすれば宜いとのことであつたしかるに父の分た後、母はとう〳〵宗助の母親に說き伏せられ、父の留守中に家にあるといふ祟を拂ふため、遠加美講といふものを招いて御祈禱することになつ

た、余も父と同じく少年時代より迷信をひどく嫌つたので、其の時極力反對したけれども、未だ十五歳の子供の悲しさ、一言の下に伯母なぞに叱りつけられて余が說は通らない。

さて兩三人の修驗者が來て其の用意に掛つたが、中座といへる者が必要なのでその役には近い頃家に雇入れた飯焚女を立てることになつた、而して室內には注連を張り、御幣などを立てゝ嚴かに飾りつけをし、中座の女は目を隱くし、御幣を持つて端坐して居る、その前で修驗者は色々の呪文を唱へ、列座の講中信者などは、大勢して異口同調に遠加美といふ經文體のものを高聲に唱へると、中座の女、初めの程は眠つて居るやうであつたが、何時かは知らず持つて居る御幣を振立てた、この有樣を見た修驗者は、直ちに中座の目隱を取つて其の前に平身低頭し『何れの神樣が御臨降であるか、御告を蒙りたい』などと曰ひ、それから『當

家の病人に就て何等の祟がありますか、何卒お知らせ下さい』と願つた、すると中座の飯焚女めが如何にも眞面目くさつて、『此の家には金神と井戸の神が祟る、又この家には無緣佛があつて、それが祟をするのだ』と、さも橫柄に曰ひ放つたそれを聞いた人々の中でも、別して初めに祈禱を勸誘した宗助の母親は得たり顏になつて、『それ御覽、神樣の御告は確かなものだ、成る程老人の話に、何時の頃か、此の家から伊勢參宮に出立して其れ限り歸宅せぬ人がある、定めし途中で病死したのであらうと云ふことを聞いて居たが、今御告の御緣佛の祟といふのは、果して此の話の人に相違あるまい、どうも神樣は明かなものだ、實に有難い』と曰つて喜び、而して此の祟を淸めるには如何したら宜からうと謂ふ所から、復た中座に伺つて見ると、『それは祠を建立して祀りをするが宜い』と曰つた。

全體余は最初から此事には反對であつたので、いよいよ祈禱するに就ては、何

か疑はしき所でも有つたらばと思つて始終注目して居たが、今無縁佛と曰つたに就て、『其の無縁佛の出た時は凡そ何年程前の事でありませうか、祠を建てるにも碑を建てるにも、その時代が知れなければ困ります』と言つたら、修驗者は重ねて中座に伺つた、すると中座は『凡そ五六十年以前である』というたので、又押返して『五六十年以前なら何といふ年號の頃でありますか』と尋ねたら、中座は『天保三年の頃である』と曰つた、所が、天保三年は今より二十三年前の事であるから、其所で余は修驗者に向ひ、『只今御聞きの通り、無縁佛の有無が明かに知れる位の神様が、年號を知らぬといふ譯はない筈のことだ、斯様いふ間違があるやうでは、まるで信仰も何も出來るものぢやない、果して靈妙に通ずる神様なら、年號ぐらゐは立派に御解りにならねばならぬ、然るに此の見易き年號すらも誤る程では、所詮取るに足らぬものであらう』と詰問の矢を放つた、宗助の母親は横

合から『其様なことを言ふと神罰が當る』といふ一言を以て自分の言葉を遮つたが、これは明白の道理で、誰にも能く解つた話だから、自然と滿座の人々も興を冷まして修驗者の顏を見詰めた、修驗者も間が惡くなつたと見えて、『是は何でも野狐が來たのであらう』と言ひ拔けた、野狐といふことなら、猶更祠を建てるの祀をするのといふことは不用だといふので、詰り何事もせずに止めることになつた、それゆゑ修驗者は自分の顏を見て、『さて〳〵、惡い少年だ』と曰はぬばかりの顏付で睨まへた、私は勝誇りたる會心の笑を禁ずることが出來なかつた。

それぎり宗助の母親はぷツつり加持祈禱といふことを廢めて了つた、村内の人人は此事を傳へ聞いて、以來修驗者の類を村には入れまい、迷信は打破すべきものぞといふ覺悟を有つやうになつた。

◎眞正なる文明

文明と野蠻といふ文字は相對的で、如何なる現象を野蠻といひ、如何なる現象を文明といふか、其の限界は隨分六ケ敷いけれども、要するに比較的のものであるから、或る文明は更に進んだ文明から見ると、矢張り野蠻たるを免れないと同時に、或る野蠻は其れより一層甚しい野蠻に對すると文明と言へる譯になるけれども、今日之を論ずるに當りては、唯一の空理にあらずして實現されて居る所のものを例とするより外はない、但し一鄕、一都市に就ても文化の程度を異にするけれども、先づ一國を標準とするのが文明野蠻といふ文字に相應しいと思ふ、私は世界各國の歷史、若くは現狀を詳細に調べて居らぬから、細密なるお話は出來ぬけれども、英吉利とか佛蘭西とか獨逸とか亞米利加とかいふ國々は、今日世

界の文明國と云うて差支ないであらう、其の文明なるものは何であるかと云ふに國體が明確になつて居て、制度が儼然と定つて、而して其の一國を成すに必要なる總ての設備が整うて、勿論諸法律も完備し、教育制度も行き屆いて居る。

斯の如く百揆皆整うて居るからと云うて、未だ文明國とは言へない、其の設備の整うて居る上に、一國を十分に維持し活動すべき實力がなくてはならぬ、此の實力といふことに就ては兵力にも論及せねばならぬが、警察の制度も、地方自治の團體も、皆その力の一部分である、斯の如きものが十分に具備して居る上に、彼此おの〳〵克く其の權衡を得て相調和し相聯絡して、一方に重きを措き過ぎるこか、若くは統一を缺くとかいふことの無いのが即ち文明と言ひ得るだらう、換言すれば、一國の設備が如何に能く整うて居ても、之を處理する人の智識能力が其れに伴はなければ、眞正なる文明國とは謂はれない、但し前に述べたる如き、

完全なる設備の整うて居る國で、之を運用する人は不完全であるといふことは、先づ少い道理であるが、或る場合には表面の體裁は完全に見ゆるが、根本が堅實でない場合もあり得ることで、謂ゆる優孟の衣冠で、立派な着物も其の人柄に似合はぬといふやうな事がないとは言はれぬ、故に眞正の文明といふことは總ての制度文物の具備と、其れから一般國民の人格と智能とによりて始めて言ひ得るだらうと思ふ、斯く觀察すれば、最早貧富といふことは論ぜぬでも、文明といふ中には自ら富の力が加はつて居ると見て宜しいけれども、形式と實力とは必ずしも一致するものに非ずして、形式が文明であつても實力は貧弱、是は甚だ不權衡の言ではあるけれども、必ず無いとは言はれない、故に曰く、眞正の文明は強力と富實とを兼ね備ふるものでなければならぬ。

さて一國の進歩は孰れに傾くかといふに、古來各國の實例を觀るに、多く文化

の進歩が先にして、實力が後より追隨するやうに思はれる、殊に國によりては兵力が先づ前驅して、富力といふものは殊更に遲れ馳せになるといふことは、多く見る例である、我が帝國の現狀も矢張りさういふ有樣と謂はねばなるまいかと思ふ、其の國體が萬國に冠絶して、而して百般の施設も、維新以後輔弼の賢臣が打寄つて漸次に建設せられたのであるから、洵に申分はないと思つて居る、只それに伴ふ富實の力が同じく完備して居るかといふと、悲いかな歳月尙ほ淺しと言はねばならぬ、富實の根本たるべき實業の養成は、短日月にして滿足し得るものではない、爲に前に曰ふ國體とか制度とかいふものが完備せるに比較すれば、富力は頗る缺如して居る、但し其の富を增殖することのみに國民擧つて努力するならば、帝國小なりと雖も種々なる方法もあるだらうけれども、富むより先に使用せねばならぬといふ必要がある、文明の治具を張るために、富實の力を減損するは

今日の大なる憂である、凡そ國を成すは唯富みさへすれば宜いといふ譯に行かぬ文明の治具を張るために、富力の一部を犧牲に供するといふことは止むを得ぬであらう、換言すれば、一國の體面を保つ爲め、一國の將來の繁盛を圖る爲め陸海軍の力を張らねばならぬ、內治にも外交にも、種々の國費を支出せねばならぬ、即ち一國の治具の爲には、其の財源を多少減損するといふことは、勢ひ免れぬことであるけれども、其れが劇しく一方に偏すると、終に文明貧弱にならぬとは謂へぬ、若しも文明貧弱に陷つたら、百般の治具は皆虛形となり、遠からずして文明は野蠻と變化する、此く考へると、文明をして眞の文明たらしむるには、其の內容をして富實、强力、此の二者の權衡を得せしめねばならぬ、我が帝國に於て今日最も患ふる所は、文明の治具を張るために、富實の根本を減損して顧みぬ弊である、これは上下一致、文武協力して其の權衡を失はぬやう勉勵せねばならぬと思ふ。

◎發展の一大要素

明治の時代は新しい事物を入れて舊い事物を改造し、汲々として進步を圖つた時代であつた、勿論進步が十分なりしとは言はれぬが、長い間國を鎖して歐米の文物に接觸しなんだものが、僅かに四五十年の間に、漸次彼の長を採り我が短を補うて、或點は彼に恥ぢぬまで進步した、勿論これは聖代の御蔭、明治天皇の聖明に由る所、在朝有司の誘導も亦謝意を表さねばならぬが、また國民の精勵の然らしむる所と謂はねばならぬ。

さて明治が大正に移つた所で、往々世間では、最早創業の時代は過ぎた、是からは守成の時代といふ人があるけれども、お互に國民は、左樣に小成に安んじて

はならぬ、版圖は小さく人口が多く、尙ほ追々に人口が增殖して行くのだから、そんな引込思案では居られぬ、內を整ふると同時に、外に展びるといふことを工夫しなければなるまい、耕地の面積は少いけれども、農法を改良して耕地の効用を增すことが出來る、種苗を改良し、耕作法を改良し、窒素肥料、燐酸肥料等、優良な肥料を宛て行ひ、集約的の農法を改良すれば、上田五俵の所は七俵も穫れ下田は二倍にも收穫が倍すであらう、今まで出來なかつた陸稻も、人造肥料によれば、一反歩から五俵も七俵も穫れるといふ例もある、耕地が狹いからとて、其の効用を增すことを粗略に考へては可かぬ、又北海道或は他の新領土等にも、須要の資金勞力を注入して、行屆くだけ事業を成立たせなければならぬ、此くお互に努めても、さて限りあるものは限りあるのでから、一面海外に向つて大和民族發展の途を開くことを、須臾も怠つてならぬのである。

海外に對つて發展するには、如何なる方面を擇ぶべきかと云へば、矢張一番利益のある所に赴くといふことは、自然の趨勢であると思ふ、氣候もよし、地味も良くて、その土地が能く人を容れ、農業に商業に、總ての事の遣りよい處を擇ぶのが人情である、是に於て私共の切に憂ふるのは、北米合衆國と我邦との關係である、今日のやうに紛議を釀して居るのは、お互實に遺憾に堪へない、惟ふに是は先方にも大なる我儘があるに相違ない、不道理を言ひ張つて居ることは事實であるが、又事の此に到つたに就ては、我が國民も反省しなければならぬ點が大にあると思ふ、是等のことは現に當面の交渉問題となつて居るから、詳細に立入つて言ひ能はぬ事情もあるけれども、國民の期待は何所までも果す勇氣を以て、而して能ふだけの忍耐を以て、大和民族の世界的發展の途を開き、何れの地方でも、厭がられ嫌はれる人民とならぬやうに心掛けることが、即ち發展の大要素で

あらうと思ふのである。

◎廓清の急務なる所以

一と揺ぎ揺いで茲に維新の大改革となつた、治める人治められる人の分界を去り、又商賣人の範圍も狭い區域にあつたものが、世界を股にかけての大活動を試みなければならぬといふことになり、又日本内地だけの商賣でも、主なる品物の運送、蓄積等は、從來大抵政府の力に依つて行はれて居つたものが、それも一切個人でしなければ爲らぬといふ風に遷り變つて來た、商人から云へば全く新天地が開かれたのである、而して彼等も亦相當の教育を受けねばならぬことになつた商であれ工であれ、一の手續を教へ、或は地理、或は物品、品目に、或は商業の歴史に、兎に角、商賣を繁昌させるに就ての必要な知識だけは、世界の粋を抜い

て教へるといふ風になつたけれども、其れは主として實業教育であつて、道德教育ではなかつた、寧ろ爾ういふ事は措いて問題にしなかつた、乃で自分の富を増さうとする人が續々と出て來る、俄分限が出る、僥倖で大富を得た者もある、それが刺戟となり誘惑となつて、誰でも爾ういふことを狙ふやうになる、斯くして益々富を殖す方にのみ相擧つて進む、そこで富む人は愈々富む、貧い者も富を狙はうとする、仁義道德は舊世紀の遺物として顧みない、寧ろ殆んど其の何物たるかを知らぬ、唯智識だけを以て自家の富を増すに汲々乎たる有樣である、腐敗に傾き、溷濁に陷り、墮落混亂を來す、固より怪むに足らない、勢ひ廓清を叫ばなければならぬ事にもなるのである。

然らば如何にして其の廓清を計るべきであらう、一般に正當なる利益を進める方法を忘れ、徒らに利慾の餓鬼となる結果、此の如き道德を滅却するやうな狀態

に陥るといふことは、前に言つた、併し其の行動を惡むの餘り、生産利殖の根本をも塞ぐといふまでに立ち至るのは、甚だ取らない、例へば男女の品行の甚だ猥褻に流れるのを嫌うて、自然の人情まで絶つといふことは、甚だ不條理なことでもあるし、また行はれ難いことでもある、遂には生々の理を失つて了ふことになるのである、實業界の腐敗墮落に對しても、唯これに對して攻擊戒飭を加へるといふ方にのみ力を盡すのが、適當なる廓清であるか否かは餘程注意すべき問題であつて、或は反つて爲に國家の元氣を喪ひ、國家の眞實の富を毀損するやうな事にならぬとも言はれぬ、廓清といふことは中々六ヶ敷い、舊に復つて、治める方の人のみが道義を重んじ、生産殖利に從事する人は成るたけ制限して、極く小さい範圍に棲息せしむるやうにして行つたならば、其の弊害を減ずることが出來るか知れないが、それでは國の富の進歩は止まつて了ふ、そこで飽くまで富を進め

富を擁護しつゝ、其間に罪惡の伴はぬ神聖な富を作らうとするには、どうしても一の守るべき主義を持たなければならぬ、それは即ち私が常に言つて居る所の仁義道德である、仁義道德と生産殖利とは決して矛盾しない、だから其の根本の理を明かにして、斯くすれば此の位置を失はぬといふことを、我れ人共に十分に考究して、安んじて其の道を行ふことが出來たならば、敢て相率ゐて腐敗墮落に陷るといふことなく、國家的にも個人的にも、正しく富を增進することが出來る信ずる。

其方法として日常の事に就き、斯る商賣には斯く〳〵、斯る事業には斯く〳〵と爰に詳述は出來ないが、第一の根本たる道理なるものは必ず生産と一致するものである、而して富をなす方法手段は、第一に公益を旨とし、人を虐げるとか人に害を與へるとか、人を欺くとか或は僞り抔いふ事のない樣にしなければなら

ぬ、此くて各々其職に從つて盡すべきを盡し、道理を誤らず富を增して行くことであれば、如何に發展して行つても、他と相侵すとか相害することは起らぬと思ふ、神聖なる富は此くて初めて得られ續けられるのである、各人各業が此域に達すれば、そこで廓淸は遂げられたのである。

子貢曰、貧而無レ諂、富而無レ驕、何如、子曰、可也、未レ若二貧而樂富而好レ禮者一也、子貢曰、詩云、如レ切、如レ瑳、如レ琢、如レ磨、其斯之謂與、子曰、賜也、始可二與言一レ詩已矣、告二諸往一而如レ來者。

論語

人格と修養

◎樂翁公の幼時

樂翁公の傳は既に廣く世間に知れ渡つて居ることであるから、今更めて述ぶるまでもないのであるが、玆に述べんとするは樂翁公の御自筆で、松平家の祕書となつて居る『撥雲筆錄』といふものに依りて、聊か公の御幼時に於ける一端を窺ふと同時に、その御人格御精神等の非凡なる所以を紹介しやうと思ふのである、即ち

『六つの年に大病に罹りたり、生くべき程心許なかりけれど、高島朔庵法眼等多くの醫師打集ひて醫しぬ、九月の頃平癒す、七つの頃にやありけん、孝經を讀

み習ひ假名なんど習ひたり、八つ九つの頃、人々皆記憶もよく才もありとて褒めの〻しりければ、我心ながらさもあることよと思ひしぞはかなかれ。』

これは御利巧だ〳〵と皆が御世辭を言ふから、自分自身は悧巧な積りで居たのが恥かしいといふ、懷舊の情を敍べられたので、甚だ床しき述懷である。

『其後大學など讀みならひたる頃、幾かへり敎へられ侍りても得覺え侍らぬして さては人々の褒めの〻しりけるは詔らひ阿ねるにこそ、實はいと不才にして不記憶なりけりと、九つの頃ふと覺りぬ、之を思へば幼き時褒めの〻しるはいと惡しきことなるべし、十餘りの頃より名を代々に高くし、日本唐土へも名聲を鳴らさんと圖りけるも、大志のやうなれども最と愚かなることにぞ侍りける。』

是に依つて見ると、十歲位の時から海外にまで聞える程の人物になりたいと思はれた、實に非凡なことである、併し御自身では、それは大志のやうではあつた

けれども、烏滸の次第であつたと謙遜して居られるのである。

『其頃より大字など多く寫して人の需めに應じたりけり、皆々請需めしも詔ひの種に生ひ出でしことなれば、其需めに應じて書きける心いと淺かりけり。』

私共も時々字などを書かせられるが、或は樂翁公が玆に言はれたやうなことがあるかも知れない。

『十餘り二つの頃、著述を好みて通俗の書など集め、大學の條下にある事々を書集めて人の敎戒の便りにせまほしく思立ちて書きけれども、古きことも覺え侍らぬ上、通俗の書は僞り多しと聞きければ止めたり。』

もう十一二歲の頃から著述をして人の敎にならうと思ふことを書き始められたのであるが、併し古いことは知らず、また通俗の書を參考にする、事實を失うて居ることがあるから、讀者を誤らしめてはならぬと思返して止められたのである。

『今思へば眞西山の大學術義の旨趣に類したる大旨なれば、蒐め侍らざりしぞ幸ひとも云ふべきにぞ、此頃より歌も詠みたれど、皆腰折の類にて覺えもし侍らず、又賴よる人もなければ、自らよみて反古にのみしたり、鈴鹿山の花の頃、旅人の行きかふ樣畫きたるを見て、

鈴鹿山旅路の宿は遠けれど振捨てがたき花の木の下

と詠みたるも、十餘り一つの頃にありけん。』

十一歳の時に既に斯ういふ歌を詠まれたのは、文藝上に於ても天才であつたやうに思はれます。

『十餘り二つの時、自敎鑑と云ふ書を書きたり、大塚氏に添削を請ひたれば、其うちの書にしては見よきなり、今もあり、淸書の頃、明和は七つとあれども五年の頃より作りたり、父上悅び給ひて史記を賜ふ、今も藏書になしぬ、十餘り

一つ二つの頃より詩を作りけれど、平仄も揃ひかねて人にも言ひ難きなり。

雨後の詩に、

虹晴淸夕氣　雨歇散秋陰
流水琴事響　遠山黛色深

又七夕の詩に、

七夕雲霧散　織女渡銀河
秋風鵲橋上　今夢莫揚波

とよみたるも、多くの師の添削にあひたれば、斯かる言葉とはなりける。』

これで見ると樂翁公は性來非常に多能で、少年の時分から餘程優れた御人のやうである、自敎鑑といふは公の藏書中に出て居るが、自分の身を修めるといふことを自ら戒めた書で、餘り長篇ではないやうに記憶して居る、私も昔これを讀ん

だこゝを覺えて居る、樂翁公は又甚だやさしい性質の御方であつたが、併し老中田沼玄蕃頭の政治をひどく憂へて、迚も是では德川家は立行くことは出來ぬといふ位に憤慨して、是非この惡政を除くには田沼を殺す外はないから、身を捨てゝ田沼を刺さうといふことを覺悟したと云ふことが、此書の中にも書いてある、元來至つて溫和な思慮深い御人であつたが、或點には餘程精神の鋭い所のあつた方のやうである、尙ほ續いて讀んで行くと、癇癖の强い所があつて、それを侍臣が嚴しく諫めたことが書いてある。

『明和八年予は十餘り四ツになれり中略予此頃より短氣にして、僅かのことにも怒りふづくみ、或は人を叱怒し、又は肩はり筋いだして理をいひなんどしたり、みな〳〵なげかしこのみいひたり、大塚孝綽ことによくいさめたり、水野爲長常にいさめて日々のよしあしをいひたり、聞けばいと感じけれど、ふづくみの

情に堪がたきに至る、床に索道のかきし太公望の釣する畫をかけて、怒の情おこれば獨りそれに打向ひて、其情をしづめけれども堪かねたり、ひと日全く怒の情なくくらしたく思ひしかど、終に其頃はなかりき、此くても十八歳の頃より洗ひそゝぎしやうになりたるこそ稀有なれ、全く左右の直言ありし故なるべし。』

是に依りて見ると、此御方は天才を有つて居られて、而して或點には餘程感情の强い性質を有つて居られたが、これと同時に大層精神修養に力を盡され、而して遂に樂翁公の樂翁公たる人格を築き上げられたものと見えるのである。

◎人格の標準は如何

人は萬物の靈長であるといふことは、人皆自ら信じて居る所である、同じく靈

長であるならば、人々相互の間に於ける何等の差異なかるべき筈なるに、世間多數の人を見れば、上を見るも方圖がなく、下を見るも際限なしと云うて居る、現に我々の交際する人々は、上王公貴人より、下匹夫匹婦に至るまで、其の差異も亦甚しいのである、一鄉一村に見るも、既に大分の差があり、一縣一州に見れば、其の差は更に大きく、之を一國に見れば益々懸隔して、殆んど底止する所なきに至るのである、人既に其の智愚尊卑に於て斯樣に差等を有するとすれば、其の價値を定むるも亦容易のことでは無い、況んや之に明確なる標準を附するに於てをやである、併し人は動物中の靈長として之を認むるならば、其間には自ら優劣のあるべき筈である、殊に人は棺を蓋うて後、論定まるといふ古言より見れば、何所かに標準を定め得る點があると思はれる。

人を見て萬人一樣なりとするには一理ある、萬人皆相同じからずとするのも亦

論據がある、隨つて人の眞價を定むるにも、此の兩者の論理を研究して適當の判斷を下さねばならぬから、隨分困難のことではあるが、其の標準を立つる前に、如何なる者を人といふか、先づ其れを定めてかゝらねばなるまいと思ふ、併しこれが中々の困難事で、人と禽獸とは何所が違ふかと言ふやうな問題も、昔は簡單に說明されたであらうが、學問の進歩に從つて、それすら益々複雜な說明を要するに至つたのである、昔歐洲の或る國王が、人類天然の言語は如何なるものであるかを知りたいと思つて、二人の嬰兒を一室に收容し、人間の言語を少しも聞かせないやうにして、何等の教育も與へずに置き、成長の後、連れ出して見たが、二人とも少しも人間らしい言語を發することが出來ず、唯獸のやうな不明瞭な音を發するのみであつたと言ふ、是は事實か否かは知らないが、人間と禽獸との相違は、極めて僅少に過ぎぬといふことは、此の一話によつても解かるのである、

四肢五體具足して人間の形を成して居るからとて、我々は是を以て直ちに人なりと言ふことは出來ぬのである、人の禽獸に異なる所は、德を修め、智を啓き、世に有益なる貢獻を爲し得るに至つて、初めて其れが眞人と認めらるゝのである、一言にして之を覆へば、萬物の靈長たる能力ある者に就てのみ、初めて人たるの眞價ありと言ひたいのである、從つて人の眞價を極むる標準も、此の意味に就て論ぜんとするのである。

古來歷史中の人々、何者か能く人として價値ある生活をなしたであらう、往昔支那の周時代にあつては、文武兩王並び起つて殷王の無道を誅し、天下を統一して專ら德政を施かれた、而して後世文武兩王を以て道德高き聖主と稱して居る、して見れば文武兩王の如きは、功名も富貴も共に得られた人と謂ふべきである、然るに文王武王周公孔子と並び稱せられて居る夫子は如何である、亦聖人として

崇められ、孔夫子に對して四配と言へる顏回、曾子、子思、孟子の如きも、聖人に亞ぐものとして推稱せられて居るに關はらず、是等の人々は終生道の爲に天下に遊說して、其の一生を捧げたものであるけれども、戰國の際、一小國家すら自ら有することは出來なかつた、されど德に於ては文武に讓らずして、其名も亦高いものであつたが、富貴といふ方面から之を物質的に評するならば、實に雲泥霄壤の差ありて比較にならないのである、故に若し富を標準として人の眞價を論ずれば、孔子は確に下級生である、併し孔子自身は果して左樣に下級生と感じたであらうか、文王、武王、周公、孔子皆其の分に滿足して其の生を終つたとするならば、富を以て人の眞價の標準とし、孔子を以て人間の下級生なりと爲すのは、適當なる評價と言ひ得るであらうか、是を以て人を評價するの困難を知るべきである、善く其人の以てする所を視、其の由る所を觀て、而して後その人の行爲が

世道人心に如何なる効果ありしかを察せざれば、之を評定することは出來ぬと思ふ。

我國の歴史上の人物に就て見るも、また其の感なき能はざるものがある、藤原時平と菅原道眞、楠正成と足利尊氏、何れを高價に評定し、何れを低價とすべきか、時平も尊氏と共に富に於ては成功者であつた、併し今日から見れば、時平の名は道眞の誠忠を顯はす對象としてのみ評さるゝに過ぎない、之に反して道眞の名は、兒童走卒と雖も尚ほ能く之を記憶して居る、然らば孰れを果して眞價ある者と目すべきであらうか、尊氏正成二氏に就て見るも同樣である、蓋し人を評して優劣を論ずることは、世間の人の好む所であるが、能く其の眞相を穿つの困難は是を以て知らるゝのであるから、人の眞價といふものは容易に判定さるべきものでは無い、眞に人を評論せんとならば、其の富貴功名に屬する謂ゆる成敗を

第二に置き、能く其人の世に盡したる精神と効果とに由つてすべきものである。

◎誤解され易き元氣

元氣とは如何なるものかと云ふに、之を形に現はして說くことは甚だ難かしい漢學から說けば、孟子の言ふ浩然之氣に當るだらうと思ふ、世間ではよく青年の元氣と言ふけれども、青年にばかり元氣があつて、老人には無くて宜いといふのでない、元氣は押並べて、更に一歩進んでは男女共になければならぬと考へる、大隈侯の如き私よりは二つもお上であるけれども、其の元氣は非常なるものである、孟子の浩然之氣につきては、孟子が『其爲レ氣也、至大至剛、以レ直養而無レ害、則塞二于天地之間一』と、斯う言つて居る、此の『至大至剛、以レ直養』といふ言葉が甚だ面白い、世間では能く元氣がないとか、元氣を出したとか云ふ、ことに依

ると、大分酩酊して途中を大聲でも出して來ると、彼は元氣が宜いと云ひ、默つて居ると元氣が惡いと云ふが、併し「ポリス」に捕つて恐れ入るといふやうな元氣は、決して誇るべき者で無い、人と爭つて自分が間違つて居つても强情を張り通す、是が元氣が宜いと思つたら大間違である、それは即ち元氣を誤解したのである、また氣位が高いといふことも元氣であらう、福澤先生の頻りに唱へて居つた獨立自尊、此の自尊なども或る場合には元氣とも言へやう、自ら助け、自ら守り、自ら治め、自ら活きる、是等と同樣な自尊なれば宜い、併し自治だの自活だのは、相當な働があるから宜いが、自尊といふことは誤解すると倨傲になる、或は不都合になる、總て惡德になつて、一寸道を通りかゝつても、此力は自尊だから己は逃げないと云つて、自働車などに突當つては頓だ間違が起る、斯るものは元氣ではなからうと思ふ、元氣といふものは然ういふものでは無い。即ち孟子の

謂ゆる至大至剛、至つて大きく至つて强いもの、而して『以レ直養』、道理正しき即ち至誠を以て養つて、それが何時までも繼續する、唯ちよつと一時酒飲み元氣で昨日あつたけれども、今日は疲れて仕舞つたと言ふ、そんな元氣では駄目である直しきを以て養つて餒うる所がなければ、『則塞二于天地之間一』是こそ本統の元氣であると思ふ。

此の元氣を完全に養ふたならば、今の學生が軟弱だ、淫靡だ、優柔だと言はれるやうな謗りは、決して受ける氣遣はなからうと思ふ、併し今日の儘では、多少惡くすると元氣を損ずる場合がないとは言はれぬ、老人とても猶ほ然りであるが特に最も任務の重い現在の青年は、此の元氣を完全に蓄はへるとを吳々も努めなくてはならぬ、程伊川の言葉であつたと思ふが、『哲人見レ機誠二之思一、志士厲行致二之爲一』との句がある、或は文字が間違つてるかも知れぬが、これは私の注意した

言葉で、今も感心するが、彼の明治時代の先輩は『哲人見レ機誠二之思一』といふことをした人である、大正時代の青年は何うしても『志士厲行致二之爲一』といふ方であつて、總て巧みに之を纏むる時代であると思ふ、故に青年は十分元氣旺盛にして、聖代に報答するの心掛が緊要であると思ふ。

◎二宮尊徳と西郷隆盛

井上侯が總大將を承つて采配を振り、私や陸奥宗光、芳川顯正、それから明治五年に英國へ公債募集のため洋行するやうになつた、吉田清成なぞが專ら財政改革を行ふに腐心最中の明治四年頃のことであるが、或日の夕方、當時私の住居した神田猿樂町の茅屋へ、西郷公が突然、私を訪ねて來られた、その頃西郷さんは參議といふもので、廟堂では此上もない顯官である、私の如き官の低い大藏大

丞ぐらゐの小身者を訪問せられるなど、既に非凡の人でなければ出來ぬことで、誠に恐れ入つたものであるが、その用談向は、相馬藩の興國安民法に就てゞあつた。

この興國安民法と申すは、二宮尊徳先生が相馬藩に聘せられた時に案出して遺され、それが相馬藩繁昌の基になつたといふ、財政やら產業やらに就ての方策である、井上侯始め私等が、財政改革を行ふに當り、この二宮先生の遺された興國安民法をも廢止しやうとの議があつた。

是を聽きつけた相馬藩では、藩の消長に關する由々しき一大事だといふので、富田久助、志賀直道の兩人を態々上京せしめ、兩人は西郷參議に面接し、如何に財政改革を行はれるに當つても、同藩の興國安民法ばかりは御廢止にならぬやうにと、俱に賴み込んだものである、西郷公は其の賴みを容れられたのだが、大久

保さんや大隈さんに話した所で取上げられさうにもなく、井上侯なんか話でもしたら、井上侯はあの通りの方ゆゑ、到底受付けて呉れさうに思はれず、頭からガミ〳〵跳付けられるに極つてるので、私を說きさへすれば或は廢止にならぬやうに運ぶだらうとでも思はれたものか、富田志賀の兩氏に對する一諾を重んじ、態態一小官たるに過ぎぬ私を茅屋に訪ねて來られたのであつた。

西鄕公は私に向はれ、斯く〳〵爾か〳〵の次第故、折角の良法を廢絕さしてしまふのも惜いから、澁澤の取計ひで此の法の立ち行くやう、相馬藩の爲に盡力して呉れぬか、と言はれたので、私は西鄕公に向ひ『そんなら貴公は二宮の興國安民法とは何んなものか御承知であるか』と御訊すると、ソレハ一向に承知せぬとのこと、如何なものかも知らずに之を廢絕せしめぬやうとの御依賴は、甚だ以て腑に落ちぬわけであるが、御存知なしとあらば致し方がない、私から御說明申し

上げやうと、その頃既に私は興國安民法に就て充分取調べてあつたので、詳しく申し述べることにした。

二宮先生は相馬藩に招聘せらるゝや、先づ同藩の過去百八十年間に於ける詳細の歲入統計を作成し、この百八十年を六十宛に分けて天地人の三才とし、その中位の地に當る六十年間の平均歲入を同藩の平年歲入と見做し、更に又この百八十年を九十年宛に分けて乾坤の二つとし、收入の少い方に當る坤の九十年間の平均歲入額を標準にして藩の歲出額を決定し、之により一切の藩費を支辨し、若し其年の歲入が幸にも坤の平均歲入豫算以上の自然增收となり、剩餘額を生じたる場合には、之を以て荒蕪地を開墾し、開墾して新に得たる新田畝は開墾の當時者に與へることにする法を定められたのである、之が相馬藩の謂ゆる興國安民法なるものであつた。

西郷公は私が斯く詳細に二宮先生の興國安民法に就て說明する所を聞かれて、『そんならそれは量レ人以爲レ出の道にも適ひ誠に結構なことであるから、廢止せぬやうにしても可いでは無いか』とのことであつた、依て私は此所で平素自分の抱持する財政意見を言つて置くべき好機會だと思つたので、如何にも仰せの通りである、二宮先生の遺された興國安民法を廢止せず、之を引續き實行すれば、それで相馬一藩は必ず立ち行くべく、今後ともに益々繁昌するのであらうが、國家の爲に興國安民法を講ずるが相馬藩に於ける興國安民法の存廢を念とするよりも、更に一層の急務である、西郷參議に於かせられては、相馬一藩の興國安民法は大事であるによつて是非廢絕させぬやうにしたいが、國家の興國安民法は之を講ぜずに共儘に致し置いても差支無いとの御所存であるか、承りたい、苟も一國を雙肩に荷はれて國政料理の大任に當らるゝ參議の御身を以て、國家の小局部なる相

馬一藩の興國安民法の爲には御奔走あらせらるゝが、一國の興國安民法を如何にすべきかに就ての御賢慮なきは、近頃以て其意を得ぬ次第、本末顚倒の甚しきものであると、切論いたすと、西郷公は之に對し、別に何とも言はれず、默々として茅屋を辭し還られてしまつた、兎に角、維新の豪傑のうちで、知らざるを知らずとして、毫も虛飾の無かつた人物は西郷公で、實に敬仰に堪へぬ次第である。

◎修養は理論ではない

修養は何所まで行らねばならぬかと云ふに、之は際限がないのである、けれども空理空論に走ることは最も注意せねばならぬ、修養は何も理論ではないので、實際に行ふべきことであるから、何處までも實際と密接の關係を保つて進まねばならぬ。

偖この實際と學理の調和といふことは、特に述べて置かねばならぬのである、要するに、理論と實際、學問と事業とが互に並行して發達せないと、國家が眞に興隆せぬのである、如何程一方が發達しても、他の一方が之に伴はなければ、其國は世界の列强間に伍することは出來ぬと思はれる、事實ばかりで滿足こは云はれず、又學理のみでは立つことが出來ないので、此の兩者がよく調和し密着する時が、即ち國にすれば文明富强となり、人にすれば完全なる人格ある者となるのである。

右に對する例證は澤山にあるが、之を漢學に求めて見れば、孔孟の儒教は支那に於ては最も尊重されて、之を經學または實學こ云つて、彼の詩人又は文章家が弄ぶ文學とは全く別物視してある、而して其れを最も能く研究し發達せしめたのが彼の支那宋末の朱子である、蓋し朱子は非常に博學で、且つ熱心に此學を說いたのである、所が、朱子の時分の支那の國運は如何であつたかこ云ふに、丁度その頃は宋朝の末で、政事も頽廢し、兵力も微弱にして、少しも實學の効は無かつたのである、即ち學問は非常に發達しても、政務は非常に混亂した、詰り學問と實際とが全く隔絶して居たのである、つまり本家本元の經學が宋朝に至りて大に振興したにも係はらず、之を採つて實際に用ゐなかつたのである。

然るに日本に於ては其の空理空文の死學であつた宋朝の儒教を利用した爲め、却へて實學の効驗を發揮したのである、之を善く用ゐたのは德川家康である、元龜天正の頃は日本を廿八天下こ稱して、國內麻の如くに亂れて、諸侯皆武備にのみ心を盡して居つたのである、その中にて家康は大に達觀して、到底武のみを以て治國平天下の策とすべきで無いこいふことを悟り、大に心を文事に注いで、支那に於ては死學空文であつた朱子の儒學を採つたのである、當初先づ藤原惺窩を

聘し、次で林羅山を用ゐて、切りに學問を實際に應用した、即ち理論と實際とを調和し接近せしめたのである、現に家康が遺訓の一として今日まで人口に膾炙する『人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如し、急ぐべからず、不自由を常と思へば不足なく、心に望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし、堪忍な無事長久の基、いかりは敵と思へ、勝つ事ばかり知りてまくる事を知らざれば、害その身に至る、おのれを責めて人をせむるな、及ばざるは過ぎたるにまされり』に就て考へて見るに、皆經學中に求めたものである、多くは論語中の警句中より成立して居る、當時殺伐の人心を慰安して、よく三百年の太平を致した所以のものは、蓋し學問の活用、即ち實際と理論とを調和して、極めて密接ならしめたるに由ることゝ思ふのである、而かも家康が此くまで朱子の儒學を採つて之を實際に應用したけれども、元祿享保の頃となつては、次第に種々の學派を生じ、空理を弄ぶ

やうになつて來て、有名なる儒者は多かつたけれども、之を實際と密着せしめたものは甚だ稀で、僅かに熊澤蕃山、野中兼山、新井白石、貝原益軒の數人に過ぎない、德川の末の微々として振はなくなつて來たのも、矢張り此の調和を失した結果であらうと思ふのである。

以上は往時の事例であるが、今日でも兩者の調和不調和が其の事物の盛衰を示して居ることは、諸君のよく知られる所と思ふ、世界の二三等國に就て見ると明かである、又一等國中にも、現に兩者が其の並行を失はんとしつゝある國もあるやうに思はれる。

翻つて帝國は如何と言へば、未だ決して十分なる調和を得て居るといふことは出來ない、のみならず、動ともすれば離隔せんとする傾向さへ見える、之を思へば實に國家の將來が案じられるのである。

故に修養を主とする者は、大に爰に鑑みる所があつて、決して奇矯に趨らず、中庸を失せず、常に穩健なる志操を保持して進まれんことを衷心より希望して止まぬのである、換言すれば、今日の修養は、力行勤勉を主として智德の完全を得るのにある、即ち精神的方面に力を注ぐと共に、智識の發達に勉めねばならぬ、而して修養が、單に自分一個の爲のみでなく、一邑一鄕、大にしては國運の興隆に貢獻するのでなければならぬ。

◎平生の心掛が大切

總じて世の中のことは心の儘にならぬが多い、獨り形の上に表はれて居る事物ばかりでなく、心に屬することも間々さういふことがある、例へば、一度斯うと心の中に堅く決心したことでも、何か不圖したことから俄に變ずる、人から勸められて遂に其の氣になると云つたやうな事もあるが、それが必ずしも惡意の誘惑でないまでも、心の遷轉から起ることで、斯く如きは意志の弱いのであると謂はねばなるまい、自ら決心して動かぬと覺悟して居ながら、人の言葉によりて變ずるが如きは、固より意志の鍛錬の出來て居るものではない、兎角平生の心掛が大切である、平素その意中に『斯うせよ』とか『斯うせねばならぬ』とか、事物に對する心掛が的確に決つて居るならば、如何に他人が巧妙に言葉を操つても、浮とそれに乘せられるやうなことはない譯だ、故に何人も問題の起らぬ時に於て其の心掛を錬つて置き、而して事に會し物に觸れた時、それを順序よく進めるが肝要である。

然るに兎角人心には變態を生じ勝ちのもので、常時は『斯くあるべし』『斯くすべし』と堅く決心して居た者も、急轉して知らず〳〵に自ら自己の本心を誘惑し

平素の心事と全く別處にこれを誘ふやうな結果を齎らすが如きは、常時に於ける精神修養に缺くる所があり、意志の鍛錬が足らぬより生ずることである。斯の如きは隨分修養も積み鍛錬を經た者でも惑はされることのないとは言はれぬものだから、況んや社會的經驗の少い青年時代などには、いやが上に注意を怠つてはならぬ、若し平生自己の主義主張として居たことが、事に當つて變化せねばならぬやうなことがあるならば、宜しく再三再四熟慮するが宜い、事を急激に決せず、愼重の態度を以て能く思ひ深く考へるならば、自ら心眼の開くものもありて、遂に自己本心の住家に立ち歸ることが出來る、此の自省熟考を怠るのは、意志の鍛錬に取つて最も大敵であることを忘れてはならぬ。

以上は自己が意志の鍛錬に關する理論でもあり、又しかく感じた所であるが、序を以て余が實驗談を此所に附加して置きたい、余は明治六年思ふ所ありて官を

辭して以來、商工業といふものが自己の天職である、若し如何やうの變轉が起つて來ても、政治界には斷じて再び携はらぬと決心した、元來政治と實業とは互に交渉錯綜せるものであるから、達識非凡の人であつたら、此の二途に立つて其の中間を巧妙に歩めば頗る面白いのであるが、余の如き凡人が左樣の仕方に出ると きは、或はその歩も誤つて失敗に終ることがないとも限らない、故に余は初めから自己の力量の及ばぬ所として政治界を斷念し、專ら實業界に身を投じようと覺悟した譯であつた、而して當時余が此の決心を斷行するに方つても、自己の考案に待つ所の多かつたことは勿論のことで、時には知己朋友よりの助言勸告も或る程度まではこれを斥け、斷々乎として一意實業界に向つて猛進を企てた、しかるに最初の決心が其れほど雄々しいものであつたにも拘はらず、さて實地に進行して見ると中々思惑通りには行かないもので、爾來四十餘年間、屢々初一念を動さ

れようとしては危く蹈み止り、漸くにして今日あるを得た譯である、今から回顧すれば最初の決心當時に想像したよりも、此間の苦心と變化とは遙かに多かつたと思はれる。

若し余の意志が薄弱であつて、夫等幾多の變化や誘惑に遭遇した場合に浮々と一歩を蹈み誤つたならば、今日或は取返しのつかぬ結果に到着して居たかも知れぬ、例へば、過去四十年間に起つた小變動の中、其の東すべきを西するやうな事があつたならば、事件の大小は別として、初一念は此所に挫折する事になる、假りに一つでも挫折されて方向が錯綜することになれば、最早自己の決心は傷けられた事になるので、それから先は五十歩百歩、もう何をしても構ふものかと云ふ氣になるのが人情だから、止め度がなくなつて仕舞ふ、彼の大堤も蟻穴より崩るるの喩の如く、左様なつては右に行くものも中途から引返して左へ行くやうなこ

とになり、遂には一生を破壞了はねばならぬ、しかるに予は幸にも左様な場合に處する毎に熟慮考察し、危く心が動きかけたことがあつても中途から取返して本心に立ち戻つたので、四十餘年間先づ無事に過して來ることを得た、これに由つてこれを觀るに、意志の鍛錬の六ケ敷きことは今更驚嘆の外はないが、併し夫等の經驗から修得した教訓の價値も、また決して少いものでは無いと思ふ、而して得た所の教訓を約言すれば、大略次の如きものがある、即ち一些事の微に至るまでもこれを閑却するは宜しくない、自己の意志に反することなら事の細大を問ふまでもなく、斷然之を跳付けて了はねば可かない、最初は些細の事と侮つてやつた事が、遂には其れが原因となつて總崩れとなるやうな結果を生み出すものであるから、何事に對しても能く考へて行らねばならぬ。

◎須らく其の原因を究むべし

乃木大將の殉死に就て世間の論ずる所を觀るに、或說の如きは、殉死に就ては多少非難なきに非ざれど、乃木大將にして始めて可なり、他人之に倣ふべきに非ずと論ずるもあり、又は絕對に感歎すべき武士的行爲にして、實に世の中を聳動せしめたる天晴の最期にて、限りなき崇敬の心を以て論評するもありて、殆んど當時の新聞雜誌が其事に就て塡められた程であるから、大將の行爲は現社會に大なる影響を與へたと言ひ得るだらうと思ふ。

私の觀る所も略ぼ後者と同樣なれども、乃木大將が末期に於ける敎訓が尊いといふよりは、寧ろ生前の行爲こそ眞に崇敬すべきものありと思ふ、換言すれば、大正元年九月十三日までの乃木大將の行爲が純潔で優秀であるから、其の一死

が靑天の霹靂の如く世間に嚴しい感想を與へたのである、大將の殉死が如何なる動機から起つたに致せ、唯その一死だけが斯の如く世間に劇しい影響を與へたのでは無からう、故に私は前に述べた點に就て少しく意見を敷衍して見ようと思ふ但し私は乃木大將とは親しみが厚くなかつたから、其の性行を審かに知らぬけれども、殉死後各方面の評論から觀察すると、實に忠誠無二の人である、廉潔の人である、其の一心は唯奉公の念に滿たされた人である、而して事に處して常に精神を是に集注して苟くもせぬ人であるといふことは、總ての行爲に於て察知し得らるゝのである。

殊に軍務的行動に就ては、何物をも犧牲にして君の爲め國の爲めに盡すといふ精神に富まれたことは、現に二人の令息が日露戰役にて前後討死された時にも、將軍は君國の爲に堅忍其の情を撓めて、涙一滴も人に見せなかつた一事に徵して

も明かである。

全體將軍は青年の頃より、軍人としては事毎に長上の命令に服從して、水火の中をも辭せぬといふ堅實なる服從氣性を持つて居られたと同時に、事の是非善惡に就ての議論には、些かも權勢に屈せぬといふ凜乎たる意考を持つて居られたやうに見受けられる、それかあらぬか、或る場合に先輩の意見に忤つて休職になつた抔といふことは、蓋し其の鞏固の意志に原因せしものと想像される、左らば至つて褊狹な過激な唯感情的の人かと思ふと、其間に靄然たる君子の風ありて、或は諧謔を以て、或は溫乎たる言動を以て、人を懷けられ、自己が率ゐた兵隊抔に對しても其れこそ心から其人の痛苦を恕察し、又その戰死に就ては、故鄕の父母妻子に對して深く哀情を添へて居られた、昔時軍人の美談として世に傳へられて居る吳起が、其の部下の兵士の創の膿を吸うて癒してやつた時に、其の武士は

大に喜びて、この創が癒えたらば將軍の爲に戰場で命を棄てねばならぬと云つて感じた、すると其母の言ふには、人情左もあるべき事であるが、汝の兄も其通りにして終に討死したとて歎いたといふ話がある、吳起が兵士の膿を吸ふたのは衷心から出たのか、或は一の術數でありはせぬかと、其の母は疑うて歎いたのではあるまいかと思ふ、然るに乃木將軍に至つては、全く天眞爛漫たる衷情から兵士を犒らはれたのである、單に軍隊に居られる時のみ然るに非ずして、學習院に院長として居られた時にも、掬するばかりの情愛が總ての方面に現はれて居る、左らば其の平生は如何にやといふと、獨り武ばかりを誇りとする人に非ずして、文雅にも富まれて居る、如何に忠誠の人でも唯武骨一片で、花を見ても面白くない月を見ても感じもないといふ人は困る、『强いばかりが武夫か』といふことは、物の本にもあり、彼の薩摩守忠度が、討死の際に和歌の詠艸を懷中せられたとか、或

は八幡太郎義家が、勿來關の詠歌の如き一の美談としてある、昔時の武士が武勇と文雅とを兼ね備へたのは、實に奥床しい感がする、然るに乃木將軍は詩歌の道にも長けて、而かも高尚な意味を平易の言葉で述べることが誠に巧みであつた、彼の二百三高地に於ける絶句の如き、或は又故郷に歸つて故老に會ふのが心苦しいといふ詩の如き、又は辭世の歌の如き、孰れも眞情流露、少しも巧みを弄せず極く滑かに詠まれて居る。

斯の如く奉公の念に強い所から、不幸にも先帝の崩御に際して、最早此世に生き甲斐がないと思はれたのであらう、固より將來の軍事に就ても、學習院の事務に就ても、また當時英吉利の皇族に對する接伴のことも、種々關心の事はありしならむも、併し輕重之に代へ難いといふ所から、忍び難きを忍びて殉死と決してさてこそ其事が發露したればこそ、將軍の心事が世間に顯はれて、實に世界を聳

動したのである、故に私は思ふ、唯その一命を棄てたのが偉いのでは無くして、六十餘歳までの總ての行動、總ての思想が偉かつたといふことを頌讃せねば爲らぬ。

兎角世の中の青年は、人の結末だけを見て之を欽羨し、其の結末を得る原因が何れほどであつたかと云ふことに見到らぬ弊が多くてならぬ、或人は榮達したとか、或人は富を得たとか云つて羨望するけれども、其の榮達若しくは其の富を得るまでの勤勉は容易ならぬ、智識は勿論、力行とか忍耐とか、常人の及ばざる刻苦經營の結果であるに相違ない、其の智識其の力行、其の忍耐といふものに想ひ到らないで、只その結果だけを見て之を羨望するのは甚だ謂れないことである、乃木大將に對するも、唯その壯烈の一死のみを感歎して、其の人格と操行とに想到せぬのは、恰かも人の富貴榮達を見て、徒らに其の結果を羨望すると同樣にな

りはせぬか、故に私は將軍に對して、殉死其物を輕視するといふ意味ではないけれども、斯の如く天下を感動せしめたる所以のものは、壯烈無比なる殉死にありと謂はんよりは、寧ろ將軍の平生の心事、平生の行狀が之をして然らしめたものなりと解釋するのである。

◎東照公の修養

東照公に驚くべきは、神道佛教儒教等に大層力を入れられたことである、之に向つて種々の調査をなされて、其の隆興を計つたことは容易でない、是れも歴史家の相當の批評もありませうが、私は特に文政を修められたについて深く敬服する、佛教には梵舜といふ人がありますが、之は餘り立派な學者では無かつた爲に東照公も感心なさらぬで、後に南光坊天海によつて佛教をお取調べになり、儒教で

は藤原惺窩を第一に聘し、尋いで其の弟子の林道春を御儒家として立派に其家を立てた、且つ此の儒教を尊んだことは頗る重かつたやうであつた、殊に東照公は論語中庸をよくお讀みなすつたことは歴史に明記してありますからして、諸君も御記憶でありませうが、神君の遺訓と稱して平假名交りの文章がある、即ち、『人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如し、急ぐべからず……云々』、私は斯樣に能く覺えて居ります、此の遺訓は全く論語から出て居ります、東照公が論語をよくお讀みなすつた證據であります、『士不レ可二以不一弘毅一、任重而道遠、仁以爲二己任一、不二亦重一乎、死而後已、不二亦遠一乎。』これは曾子といふ人の語で、論語の泰伯篇にあります、『人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し』と全く同意味であります、また末段の『及ばざるは過ぎたるよりまされり』は、孔子の言から出たのです、而して孔子は『過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し』と言ふたを、公は『勝

れり』と強くしたのです、是等の批許はこれだけで止めますが、兎に角この御遺訓が論語より出たといふことは、諸君にも明瞭にお解りでありませう、その他にも此の道德については餘程お心を用ゐられたものと見える、元龜天正の頃はあの通り亂世が打續いて、世の中に文學趣味などは殆んど無くなり、仁義道德の何者か分らぬといふ時に、誰が申上げたともなく、夙く既に文學を盛にしなければならぬといふことに就て御心を勞され、而かもそれが根本的文學であつて、切に仁義道德を重んずる主義を以て全然朱子學を用ゐられたやうに思ひます、爾來追々と經學にも各派が生じて參りましたが、林家では徹頭徹尾朱子學を主として居る東照公の是等の御用意は如何なる御手際であるか、私は敬服に餘りありといふ外ない、更に又注目すべきは佛敎であります、佛敎に就ても餘程御注意が深く御穿鑿が屆いたやうであります、初め三河の大樹寺に歸依して、大樹寺の僧侶と御親

交があつたやうであります、而して大樹寺は淨土宗であります、尋いで芝の增上寺の住職をも召され、駿河にお移りになつてからは金地院の崇傳承兌抔を御用になり、後には東叡山を開いたる南光坊天海卽ち慈眼大師號を受けた人である、此の天海は實に僧侶中の英雄である、英雄と言うては少し形容に過ぎるけれども僧侶中の傑出した人であつた、殊に精力絕倫で、而かも百二十六まで生きたといふ人でありますから、大隈侯の豫定より一年餘計に生存した、東照公は深く此天海に御歸依になつて、屢次その說をお聽きなされたやうに見受けられます、此頃も南光坊天海の傳記を調べつゝ居りますが、駿河に於て公は數次その法談をお聽きなされた、長い年月の間にはどれほどであつたか分明ならぬが、天海の傳記に書いてありました所では、或年の九十日の間に六七十回の法談があつたと云うてあります、縱ひ御隱居であつても、江戸から始終文書が往復する、京都からの往

復も同様であらうから、中々閑散で能樂とか茶事三昧に日を暮されたのでは無からう、而して寸暇あれば其間に法談に御出座なすつたのであらうと思ひます、德川實記には詳しく書いてありませぬが、南光坊天海が常に顧問となつて色々の得話を申上げたといふことである。

◎誤解されたる修養説を駁す

修養といふことに就て、私は或者より攻擊を受けたことがある、其説は大體二つの意味に分れて居たのである、其の一つは、修養は人の性の天眞爛漫を傷けるから宜くないと言ふので、他の一つは、修養は人を卑屈にすると言ふのであつた依つて是等の異見に對して答へて置いたことを左に述べて見ようと思ふのである

先づ修養は、人の本然の性の發達を阻害するから宜くないといふは、修養と修

飾とを取り違へて考へて居るものと思ふ、修養とは身を修め德を養ふといふことにて、練習も研究も克己も忍耐も都て意味するもので、人が次第に聖人や君子の境涯に近づくやうに力めるといふことで、それが爲に人性の自然を矯めるといふことは無いのである、つまり人は十分に修養したならば、一日々々と過を去り善に遷りて聖人に近づくのである、若しも修養した爲に、天眞爛漫を傷けると言ふならば、聖人君子は完全に發達した者でないといふことになる、又修養の爲に僞君子となり、卑屈に陷るならば、其の修養は誤れる修養であつて、吾々の常に言ふ修養ではないと思ふ、人は天眞爛漫が善いといふことは私も最も賛成する所であるが、人の七情卽ち喜怒哀樂愛惡慾の發動が、いつ如何なる場合にも差支ないとは言はれぬ、聖人君子も發して節に中るのである、故に修養は人の心を卑屈にし天眞を害するものと見るは大なる誤りであると斷言するのである。

修養は人を卑屈にすると謂は、禮節敬虔などを無視するより來る妄說と思ふ、凡そ孝悌忠信仁義道德は日常の修養から得らるゝので、決して愚昧卑屈で其の域に達するものではない、大學の致知格物も、王陽明の致良知も、矢張り修養である、修養は士人形を造るやうなものではない、反つて己の良知を增し、己れの靈光を發揚するのである、修養を積めば積むほど、其人は事に當り物に接して善惡が明瞭になつて來るから、取捨去就に際して惑はず、而かも其の裁決が流るゝ如くなつて來るのである、故に修養が人を卑屈愚昧にすると言ふは大なる誤解で、極言すれば、修養は人の智を增すに於て必要だと云ふことになるのである、是を以て修養は智識を輕んぜよといふのではない、唯今日の教育は、餘りに智を得るのみに趨つて、精神を練磨することに乏しいから、それを補ふための修養である修養と修學を相容れぬ如くに思ふのは大なる誤りである。

蓋し修養といふことは廣い意味であつて、精神も智識も身體も行狀も向上するやうに練磨することで、青年も老人も等しく修めねばならぬ、斯くて息むことなければ、遂には聖人の域にも達することが出來るのである。

以上は私が二つの反對說即ち修養無用論者に對して反駁したる大要であるが、青年諸氏も亦この考で大に修養せられんことを切望するのである。

◎權威ある人格養成法

現代青年に取つて最も切實に必要を感じつつあるものは人格の修養である、維新以前までは、社會に道德的の教育が比較的盛んな狀態であつたが、西洋文化の輸入するに連れて思想界に少からざる變革を來し、今日の有樣では殆ど道德は混沌時代となつて、即ち儒教は古いとして退けられたから、現時の青年には之が十

分咀嚼されて居らず、といふて耶蘇教が一般の道德律になつて居る譯では尙更なし、明治時代の新道德が別に成立したのでもないから、思想界は全くの動搖期で國民は孰れに歸嚮してよいか、殆んど判斷にさへ苦しんで居る位である、從つて一般靑年の間に人格の修養といふことは幾ど閑却されて居るかの感なきを得ないが、これは實に憂ふべき趨向である、世界列强國が孰れも宗敎を有して道德律の樹立されて居るのに比し、獨り我國のみが此の有樣では、大國民として甚だ恥かしい次第ではないか、試みに社會の現象を見よ、人は往々にして利己主義の極端に馳せ、利の爲には何事も忍んで爲すの傾があり、今では國家を富强にせんとするよりも、寧ろ自己を富裕にせんとする方が主となつて居る、富むことも固より大切なことで、何も好んで簞食瓢飲陋巷に在つて其の樂を改めぬといふことを最上策とするには及ばない、孔子が『賢なる哉回や』と、顏淵の淸貧に安んじ

て居るのを褒められた言葉は、要するに『不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し』といふ言葉の裏面を曰はれたまでゝ、富は必ずしも惡いと貶めたものではない、併しながら唯一身さへ富めば足るとして、更に國家社會を眼中に置かぬといふは慨すべき極である、說は富の講釋に入つたが、何にせよ社會人心の歸向が左樣いふ風になつたのは、槪して社會一般人士の間に人格の修養が缺けて居るからである、國民の歸依すべき道德律が確立して居り、人はこれに信仰を持つて社會に立つといふ有樣であるならば、人格は自ら養成されるから、社會は滔々として我利のみ是れ圖るといふやうなことはない譯である、故に余は靑年に向つて只管人格を修養せんことを勸める、靑年たるものは眞摯にして率直、しかも精氣內に溢れ活力外に揚る底のもので、謂ゆる威武も屈する能はざる程の人格を養成し、他日自己を富裕にすると共に、國家の富强をも謀ることを努めねばならぬ

信仰の一定せられざる社會に處する青年は、危險が甚だしいだけに自己もそれだけに自重してやらねばならぬのである。

さて、人格の修養をする方法工夫は種々あらう、或は佛教に信仰を求めるも宜しからう、或は「クリスト」教に信念を得るも一方法であらうが、余は青年時代から儒道に志し、而して孔孟の教は余が一生を貫いての指導者であつただけに、矢張り忠信孝悌の道を重んずることを以て大なる權威ある人格養成法だと信じて居る、これを要するに忠信孝悌の道を重んずるといふことは全く仁を爲すの基で處世上一日も缺くべからざる要件である、既に忠信孝悌の道に根本的修養を心掛けた以上は、更に進んで智能啓發の工夫をしなければならぬ、智能の啓發が不十分であると、兎角世に處して用を成すに方り完全なることは期し難い、從つて忠信孝悌の道を圓滿に成就するといふことも出來なくなつて來る、如何となれば、

智能が完全なる發達を遂げて居ればこそ、物に應じ事に接して是非の判別が出來利用厚生の道も立つので、茲に始めて根本的の道義觀念と一致し、處世上何等の誤謬も仕損じもなく、能く成功の人として終局を全うすることを得るからである人生終局の目的たる成功に對しても、近時多種樣に之を論ずる人があつて、目的を達するに於ては手段を選ばずなどと、成功といふ意義を誤解し、何をしても富を積み地位を得られさへすれば、其れが成功であると心得て居る者もあるが、余は其樣な說に左袒することが出來ない、高尙なる人格を以て正義正道を行ひ、然る後に得た所の富、地位でなければ、完全な成功とは謂はれないのである。

◎商業に國境なし

明治三十六年桑港に於て學童問題といふものが突發した、それから後も次

第に日米間の國交が薄くなるやうな傾向を生じたといふのは、日本人が薄くするのでは無くして、亞米利加の或る方面の人が、段々に日本を嫌ふといふ有様を生じた、偖さういふ有様を生ずること、恰かも明治三十五年に桑港の金門公園に於て見た所の『日本人泳ぐべからず』の事柄が段々盛んに進んで來るやうになつた、亞米利加に對して特殊の印象を有つてる私、殊に實業界の一人として、又日本全體の實業界に對して深く心神を勞して居る身であるから、國交上に大なる憂を抱いた、其後桑港に居る日本人間に在米日本人會なるものを組織した、其の會長の手島謹爾氏が、特に渡邊金藏といふ人を日本に送られて、私に請求せらるゝには、「カルフオルニヤ」州に於て亞米利加人が兎角日本人を嫌ふといふ感情を改善せしむる爲に、在米日本人會を企てたのである、就ては本國(日本)に於ても其の意味を理解して、大に贊同して呉れるやうにと云ふことであつた、私は

其の企圖の至極機宜に適するものと思つて、我々も充分に助力するから、在米諸君も大に力めるやうにしたら宜からうと言つて、渡邊金藏氏に私が明治三十五年に金門公園に於て感ぜしことを話して、會長たる手島氏を初め、其他の會員にも能く注意して呉れといふことを傳言した、それが明治四十一年であつたと思ふ。

その歳の秋、亞米利加から太平洋沿岸の商業會議所の議員が、多數日本へ來遊することになつた、それは我が東京商業會議所及び各地の商業會議所が同じ位置なるを以て、太平洋沿岸の商業會議所の諸君に、團體を組んで日本に旅行して呉れといふ事を勸誘したに因るものであるが、一は日米兩國間の國交親善に努むる爲め、總ての誤解を除却したいといふ意味を以て成立つたものである、其時に日本に來遊せられたのは、桑港に於てはエフ、ダブリユー、ドールマン、「シヤト

ル」ではジエー、デイ、ローマン或は「ポートランド」のオー、エム、クラーク等の人々では私は種々の會合に於て是等の諸君に會談して、日米の關係に就て從來の沿革を詳述し、諸君の力で誤解を解くやうにして戴きたいと希望し、また一方には日本から米國に移住してる人々に就ては、歐米の習慣に慣れぬ爲に公德が修まらぬとか、或は風采が鄙劣だとか、或は同化しないとか云ふやうな缺點があれば、其の缺點は相共に矯正して、勉めて直させるやうにして、米國人に嫌はれぬ所の人間たらしむることを心掛けるのが肝要である、今日の場合、人種とか宗教とかの相違から、日本人を嫌ふといふやうなことは、文明なる亞米利加人としてよもあるまいと思ふ、若し之れありとすれば、それは亞米利加人の誤謬である、のみならず、亞米利加の當初の趣意に悖る譯である、我が日本を世界に紹介して呉れたのは亞米利加である、日本は其れを德として今日まで國交の親善を務めて

居るのに、其の亞米利加が人種的の僻見、宗教差異の偏頗心から、日本人を嫌つて差別的待遇をすると云ふのは、亞米利加としてなすべきことで無い、果して然らば亞米利加は、初めは正義にして後には暴戻と曰はねばならぬ、といふことを懇々と述べたに付て、當時來遊せられた商業會議所の諸君も、誠に道理だと言うて深く喜んで呉れた。

君子は愼みて以て禍を辟け、篤くして以て揜はれず、恭しくして以て恥に遠ざかる。

禮記

之を求むるに道あり、之を得るに命あり、是れ求むるとも得るに益なし、外に在る者を求むればなり。

孟子

算盤と權利

◎仁に當つては師に讓らず

世人は動もすれば、論語主義には權利思想が缺けて居る、權利思想なき者は文明國の完全なる教とするに足らぬと論ずるものが有るやうだが、是は論ずる人の誤想謬見と謂はねばならぬ、成る程、孔子教を表面から觀察したなら或は權利思想に缺けて居るやうに見えるかも知れぬ、基督教を精髄とせる泰西思想に比較すれば、必ず權利思想の觀念が薄弱であるが如く思はれるであらう、併しながら余は此の如き言をなす人は、未だ以て眞に孔子を解した者ではないと思ふ。

基督や釋迦は始めより宗教家として世に立つた人であるに反し、孔子は宗教を

以て世に臨んだ人でないやうに思はれる、基督や釋迦とは全然その成立を異にしたものである、殊に孔子の在世時代に於ける支那の風習は、何でも義務を先にし權利を後にする傾向を帶びた時であつた、斯の如き空氣の中に成長し來つた孔子を以て、二千年後の今日、全く思想を異にした基督に比するは、既に比較すべからざるものを比較するのであるから、此の議論は最初より其の根本を誤つたものと謂ふべく、兩者に相違を生ずることは固より當然の結果たらざるを得ないのである、然らば孔子教には全然權利思想を缺いて居るであらうか、以下少しく余が所見を披瀝して世の蒙を啓きたいと思ふ。

論語主義は己を律する教旨であつて、人は斯くあれ、斯くありたいといふやうに、寧ろ消極的に人道を說いたものである、而して此の主義を押し擴めて行けば遂には天下に立てるやうにはなるが、孔子の眞意を忖度すれば、初から宗教的に

人を教へる爲に說を立てようとは考へてなかつたらしいけれども、孔子には一切教育の觀念が無かつたとは言はれぬ、若し孔子をして政柄を握らしめたならば、善政を施き國を富まし、民を安んじ、王道を十分に押し廣めゝ意志であつたらう換言すれば、初めは一の經世家であつた、其の經世家として世に立つ間に、門人から種々雜多のことを問はれ、それに就て一々答を與へた、門人と謂つても各種の方面に關係を持つた人の集合であるから、其の質問も自ら多樣多岐に亙り、政を問はれ、忠孝を問はれ、文學、禮樂を問はれた、此の問答を集めたものが軈て論語廿篇とはなつたのである、而して詩經を調べ、書經を註し易經を集め、春秋を作りたゝ抔は晩年のことで、福地櫻痴居士が曰へる如く、六十八歳より以後の五年間を、纔に布敎的に學事に心を用ゐたらしく見える、されば孔子は權利思想の缺けたる社會に人となり、而も他人を導く宗敎家として世に立つた譯でないから、その敎の上に權利思想が劃然として居らぬは已むを得ないのである。

然るに基督は之に反し、全く權利思想に充實された敎を立てた、元來猶太、埃及等の國風として豫言者といふやうな者の言を信じ、從つて其種の人も多いのであつたが、基督の祖先たるアバラハムより基督に至るまで殆ど二千年を經て居る間に、モーゼとかヨハネとかいふ幾多の豫言者が出て、或は聖王が出て世を治めるとか、或は王樣同樣に世を率ゐて立つ所の神が出るとか言ひ傳へて居た、此時に方つて基督は生れたのであつたが、國王は豫言者の言を信じ、自己に代つて世を統ぶる者に出られては大變だと云ふ所から、近所の子供を皆殺させたけれども基督は母マリヤに連れられて他所へ行つた爲に此難を免れた、耶蘇敎は實に斯の如き誤夢想的の時代に生れた宗敎であるから、從つて其の敎旨が命令的で又權利思想も强いのである。

併し基督教に説く所の『愛』と論語に教ふる所の『仁』とは殆んど一致して居ると思はれるが、其所にも自動的と他動的との差別はある、例へば、耶蘇教の方では、『己の欲する所を人に施せ』と教へてあるが、孔子は『己の欲せざる所を人に施す勿れ』と反對に説いて居るから、一見義務のみにて權利觀念が無いやうである、併し兩極は一致すといへる言の如く、此の二者も終局の目的は遂に一致するものであらうと考へる。

而して余は、宗教として將た經文としては耶蘇の教がよいのであらうが、人間の守る道としては孔子の教がよいと思ふ、こは或は余が一家言たるの嫌があるかも知れぬが、殊に孔子に對して信賴の程度を高めさせる所は、奇蹟が一つもないといふ點である、基督にせよ、釋迦にせよ、奇蹟が澤山にある、耶蘇は磔せられた後三日にして蘇生したといふが如きは明かに奇蹟ではないか、尤も優れた人の

ことであるから、必ず左樣いふことは無いと斷言も出來ず、夫等は凡智の測り知らざる所であると謂はねばなるまいが、併し之を信ずれば迷信に陷りはすまいか斯る事柄を一々事實と認めることになると、智は全く晦まされて、一點の水が藥品以上の效を奏し、焙烙の上からの炙が利目あるといふことも事實として認めなくては爲らなくなるから、其の因つて來る所の弊は甚しいものである、日本も文明國だと謂はれて居ながら、未だ白衣の寒詣や、不動の豆撒が依然として消滅せぬのは、迷信の國だといふ譏を受けても仕方がない、然るに孔子に此の忌むべき一條の皆無なのは余の最も深く信ずる所以で、また是より眞の信仰は生ずるであらうと思ふ。

論語にも明かに權利思想の含まれて居ることは、孔子が『仁に當つては師に讓らず』といつた一句、これを證して餘りあること〻思ふ、道理正しき所に向うて

は飽くまでも自己の主張を通してよい、師は尊敬すべき人であるが、仁に對しては其の師にすら讓らなくもよいとの一語中には、權利觀念が躍如として居るではないか、獨り此の一句ばかりでなく、廣く論語の各章を渉獵すれば、これに類した言葉は尙ほ澤山に見出すことが出來るのである。

◎金門公園の掛札

私が初めて歐羅巴へ旅行したのは舊幕府時代であつた、慶應三年に佛蘭西に行つて、約一年も居り、其他の國々も巡廻して、一ト當りの事情は知るを得たけれども、不幸にして其時には亞米利加に旅行をしなかつたが、明治三十五年（西曆一千九百二年）に初めて亞米利加へ行つた、曾て其の土地は踏まぬでも、十四五歳の時から亞米利加なるものを知り、其の外交の關係に就て特に注目し、且つ

從來の國交が甚だ適順に進んで居たので、亞米利加といふ音は、常に自分の耳を樂しましめるものであつた、而して其の土地を初めて見たのであるから、事々物物實に私の心を喜ばして、幾んど我が故郷へでも歸つたやうな感じを持つた、最初に桑港へ上陸して樣々なる事物に接觸して、深く興味を持つて居つた、所が、唯一つ大に私の心を刺戟したのは、金門公園の水泳場へ行つた時に、其の水泳場の掛札に『日本人泳ぐべからず』といふことが書いてあつた、これは私の如き亞米利加に對して愉快なる感じを持つて居る身には、特に奇異の思ひをなさしめた、當時桑港に居つた日本の領事上野季三郎といふ人に、何故かゝる掛札があるかと問ふたら、それは亞米利加に來て居る移住民の青年等が、公園の水泳場に行つて、亞米利加の婦人が泳いで居るのを、潛行して足を引張る、さういふ惡戲が多い爲に、右の掛札を掛けられたのである、と說明した、其時に私は大に驚

いて、其れは日本の青年の不作法が原因をなして居る、併しながら此く些細なことでも、兎に角差別的の待遇を受けるといふことは、日本として心苦しい話だ、斯ういふ事が段々増長して行くと、終には兩國の間に如何なる憂ふべき事が生ずるかも知れぬ、さなきだに東西洋の人種間には、種族の關係、宗教の關係といふものは、斯の如く親んで居るとも、未だ全く融和したとは言へないやうに思ふのに、さういふ事が現はれたのは眞に憂ふべきことである、領事に職を奉ずる人は充分御注意をして欲しいものだと言つて別れたが、之が三十五年の六月の初めであつた、尋で市俄古、紐育、「ボストン」、費府を經て華盛頓に往つた、こゝで時の大統領ルーズヴエルト氏に謁見することが出來た、其他にもハリマン、ロツクフエラー、スチルマン抔の亞米利加で有名なる人々にも面會した、初めルーズヴエルト氏に面會した時に、ル氏は頻りに日本の軍隊と美術とに就て賞讃の辭を與へられた、日本の兵は勇敢にして軍略に富み、且つ仁愛の情に深く、節制ありて極めて廉潔である、それは北清事件の時に、亞米利加の軍隊が行動を共にしたに依りて、日本の軍隊の善良なるを見て敬服したといふことであつた、また美術も歐米人が如何に羨望しても、企て及ばざる一種の妙味を有つて居ると言つて賞めた、私は此時に、自分は銀行家であつて美術家ではない、又軍人でないから軍事も知らない、然るに閣下は私に向つて軍事と美術だけをお賞め下すつたが、次回に私が閣下にお目に掛る時には、日本の商工業に對して御賞讃のお言葉のあるやうに、不肖ながら私は國民を率ゐて努める積りであると答へた、之に對してル氏が云ふには、私は日本の商工業が劣つて居るといふ意味を以て、他を褒めた譯ではなかつた、詰り軍事と美術とが先に自分の眼についたから、日本の有力なる人に向つては、先づ日本の長所を述べるのが宜いと思つたのである、決して日本の

商工業を輕蔑したのでは無い、私の言葉が惡るかつたのだから惡い感じを持つて下さらぬやうにして欲しい、イヤ決して惡い感じは持ちませぬ、閣下が日本の長所を褒めて下さつたのは難有いけれども、私は商工業が第三の日本の長所たるやうになりたいと、頻りに苦心して居るのであると言つて、胸襟を披いて談話したことがある、其後亞米利加の各地に於て種々の人々にも會ひ、いろ〳〵の物にも接觸して、誠に愉快なる旅行を了つて歸朝したのである。

◎唯王道あるのみ

惟ふに社會問題とか勞働問題等の如きは、單に法律の力ばかりを以て解決されるものではない、例へば一家族内にても、父子兄弟眷族に至るまで各〻權利義務を主張して、一も一も法律の裁斷を仰がんとすれば、人情は自ら險惡となり、

障壁は其の間に築かれて、事毎に角突き合ひの沙汰のみを演じ、一家の和合團欒は殆んど望まれぬ事となるであらう、余は富豪と貧民との關係も、亦それと等しきものがあらうと思ふ、彼の資本家と勞働者との間は、從來家族的の關係を以つて成立し來つたものであつたが、俄に法を制定して是のみを以て取締らうとするやうにしたのは、一應尤もなる思ひ立ちではあらうけれども、之が實施の結果、果して當局の理想通りに行くであらうか、多年の關係に因つて資本家と勞働者との間に、折角結ばれた所の言ふに言はれぬ一種の情愛も、法を設けて兩者の權利義務を明かに主張するやうになれば、勢ひ疏隔さるゝに至りはすまいか、それでは爲政者側が骨折つた甲斐もなく、又目的にも反する次第であらうから、此處は一番深く研究しなければならぬ所であらうと思ふ。

試みに余の希望を述ぶれば、法の制定は固より可いが、法が制定されて居るか

らと云つて、一も二もなく其れに裁斷を仰ぐこいふことは、成るべくせぬやうに仕たい、若しそれ富豪も貧民も王道を以て立ち、王道は即ち人間行爲の定規であるといふ考を以て世に處すならば、百の法文、千の規則あるよりも遙に勝つた事と思ふ、換言すれば、資本家は王道を以て勞働者に對し、勞働者も亦王道を以て資本家に對し、其の關係しつゝある事業の利害得失は即ち兩者に共通なる所以を悟り、相互に同情を以て始終するの心掛ありてこそ、始めて眞の調和を得らるゝのである、果して兩者が斯うなつて了へば、權利義務の觀念の如きは、徒らに兩者の感情を疎隔せしむる外　殆んど何等の效果なきものと言うて宜からう、余が往年歐米漫遊の際實見した獨逸の「クルツプ」會社の如き、又米國「ボストン」附近の「ウオルサム」時計會社の如き、其の組織が極あて家族的であつて、兩者の間に和氣靄然たるを見て頗る賞稱を禁じ得なかつた、これぞ余が謂ゆる王

道の圓熟したるもので、斯うなれば法の制定をして幸に空文に終らしむるものである、果して此の如くなるを得ば、勞働問題も何等意に介するに足らぬではないか。

然るに社會には是等の點に深い注意も拂はず、漫りに貧富の懸隔を强制的に引直さんと希ふ者がないでもないけれども、貧富の懸隔は其の程度に於てこそ相違はあれ、何時の世、如何なる時代にも必ず存在しないといふ譯には行かぬものである、勿論國民の全部が悉く富豪になることは望ましいことではあるが、人に賢不肖の別、能不能の差があつて、誰も彼も一樣に富まんとするが如きは望むべからざる處、從つて富の分配平均などとは思ひも寄らぬ空想である、要するに富むものがあるから貧者が出るこいふやうな論旨の下に、世人が擧つて富者を排擠するならば、如何にして富國强兵の實を擧ぐることが出來やうぞ、個人の富は

即ち國家の富である、個人が富まんと欲するに非ずして、如何でか國家の富を得べき、國家を富まし自己も榮達せんと欲すればこそ、人々が、日夜勉勵するのである、其の結果として貧富の懸隔を生ずるものとすれば、そは自然の成行であつて、人間社會に免るべからざる約束と見て諦らめるより外仕方がない、とは云へ常に其の間の關係を圓滿ならしめ、兩者の調和を圖ることに意を用ふることは、識者の一日も缺くべからざる覺悟である、之を自然の成行き人間社會の約束だからと、其の成るまゝに打棄て置くならば、遂に由々しき大事を惹起するに至るは亦自然の結果である、故に禍を未萌に防ぐの手段に出で、宜しく王道の振興に意を致されんことを切望する次第である。

◎競爭の善意と惡意

御互實業者側、殊に輸出貿易に從事する諸君に向つて商業道德といふと、商業にのみ道德があるやうに聞ゆるが、道德こいふものは世の中の人道であるから、單に商業家にのみ望むべきもので無い、商業の道德は斯くある、武士の道德は斯うである、政治家の道德は斯樣であること、何か官服の制度見たやうに、線が三つあるこか四つあるとかいを如き變つたものではない、人道であるから總ての人が守るべきもので、孔子の教で云ふならば『孝悌は仁を爲すの本』といふやうに、初め孝悌から踐み出して、それから大きく仁義にもなり、忠恕にもなる、之を總稱して道德こいふやうに爲つて來るのであらう、さういふ廣い人道的の道德でなくして、商賣上殊に輸出營業などに付て注意を望むのは、競爭に屬する道德である、是は特に申合せて、其の間の約束を道德的に堅固にしたいと、余は希望して止まぬのである、總て物を闘むには競ふといふことが必要であつて、競ふから

勵みが生ずるのである、謂ゆる競爭なるものは、勉强又は進歩の母といふは事實であるけれども、此の競爭に善意と惡意との二種類があるやうである、一歩進んで言ふならば、毎日人よりも朝早く起き、善い工夫をなし、智惠と勉强とを以て他人に打克つといふは、是れ卽ち善競爭である、併しながら他人が事を企つて世間の評判が善いから、之を眞似て掠めてやらうとの考で、側の方から之を侵すといふのであつたら、それは惡競爭である、簡單には斯く善惡二つに言ひ得るけれども、抑も事業は百端で、從つて競爭も亦限りなく分れて來る、而して若し此の競爭の性質が善でなかつた場合は、己れ自身には事によりて利益ある場合もあらうけれども、多くは人を妨げるのみならず、己れ自身にも損失を受くる、單に自他の關係のみに止まらずして、其の弊害や殆んど國家にまで及ぶ、乃ち日本の商人は困つたものだと外國人に輕蔑されるやうに爲つて來るだらうと思ふ、尠に至

ると其の弊や實に大である、此所に御會合の方々には斯ることは斷じてあるまいが、若しもありてはと、婆心を述るのである、併し世間押並べて此の弊害が多いと聞いて居る、殊に雜貨輸出の商賣などに付て、惡い意味なる競爭、卽ち道德に缺くる所ある事柄が、人を害し己を損じ、併せて國家の品位を惡くする、商工業者の位地を高めやうと相互に努めつゝ、反對に低めるといふ事になるのである。

然らば如何なる具合に經營したら宜いかと言ふならば、須らく事實に依らねば言明は出來兼るが、余が思ふには善意なる競爭を努めて、惡意なる競爭は切に避けるのである、此の惡意なる競爭を避けるといふことは、詰り相互の間に商業道德を重んずるといふ强い觀念を以て固まつて居つたならば、勉强するからとて惡意の競爭にまで陷るといふことはなく、或る度合に於て斯うしては爲らぬといふ寸法は、敢て『バイブル』を讀まぬでも、論語を暗んじぬでも必ず分るであらう

と思ふ、元來此の道德といふものは餘りむづかしく考へて、東洋道德でいふならば、四角の文字を並べ立てると、遂に道德が御茶の湯の儀式見たやうになつて、一種の唱へ言葉になつて、道德を說く人と道德を行ふ人とが別物になつて仕舞ふ是は甚だ面白くない。

全體道德は日常にあるべきことで、チョッと時を約束して間違はぬやうにするのも道德である、人に對して讓るべきものは相當に讓るも道德である、又或る場合には、人よりは先にして人に安心を與へてやるといふのも道德である、事に臨んでは義俠心も持たなければならぬ、是も一種の道德である、チョッと品物を賣るに付ても、道德は其の間に含んで居る、故に道德といふものは、朝に晩に始終付いて居るものである、然るに道德を大層むづかしいものにして、隅の方に道德を片附けて置いて、さて今日からは道德を行ふのだ、此の時間が道德の時間だと

いふやうな憶劫なものではない、若し商工業などに付ての競爭上の道德といふものがあつたら、前來繰返せし通り、善意競爭と惡意競爭、妨害的に人の利益を奪ふといふ競爭であれば、之を惡意の競爭といふのである、然らずして品物を精撰した上にも精撰して、他の利益範圍に喰ひ込むやうなことはしない、これは善意の競爭である、つまり是等の分界は何人でも自己の良心に徵して判明し得ることゝ思ふ。

之を要するに、何業に拘はらず、自己の商賣に勉强は飽くまでせねばならぬ、また注意も飽くまでせねばならぬ、進步は飽くまでせねばならぬのであるが、それと同時に惡競爭をしては爲らぬといふことを、强く深く心に留めて置かねば爲らぬのである。

◎合理的の經營

現代に於ける事業界の傾向を見るに、まゝ惡德重役なる者が出でて、多數株主より依託された資産を、恰かも自己專有のものゝ如く心得、之を自儘に運用して私利を營まんとする者がある、それが爲め會社の內部は一の伏魔殿と化し去り、公私の區別もなく秘密的行動が盛んに行はれるやうになつて行く、眞に事業界の爲に痛嘆すべき現象ではあるまいか。

元來商業は政治などに比較すれば、却つて機密抔といふことなしに經營して行かれる筈のものであらうと思ふ、唯銀行に於ては事業の性質として幾分秘密を守らねばならぬことがある、例へば、誰に何程の貸付があるとか、それに對してどういふ抵當が入つて居るとかいふことは、德義上これを秘密にして置かねばな

らぬことであらう、又一般商賣上のことにても、如何に正直を主とせねば爲らぬとは云へ、此の品物は何程で買取つたものだが、今これ〳〵に賣るから幾らの利益のあると云ふやうなことを、わざ〳〵世間へ觸れまはす必要もあるまい、要するに不當なることさへないならば、それが道德上必ずしも不都合の行爲となるものではあるまいと思ふ、併し是等の事以外に於て、現在有るものを無いといひ、無いものを有るといふが如き、純然たる嘘を吐くのは斷じて宜しくない、故に正直正銘の商賣には、機密といふやうなことは、先づ無いものと見て宜しからう、然るに社會の實際に徵すれば、會社に於て無くてもよい筈の秘密があつたり、有るべからざる所に私事の行はれるのは如何なる理由であらうか、余は之を重役に其人を得ざるの結果と斷定するに躊躇せぬのである。

然らば此の禍根は、重役に適任者を得さへすれば自ら絕滅するものであるか

適材を適所に使ふといふことは、中々容易のものではなく、現在にても重役として
の技倆に缺けた人で其職に在るものが少くない、例へば、會社の取締役若くは監
査役などの名を買はんが爲に、消閑の手段として名を連ねて居る、謂ゆる虚榮的
重役なるものがある、彼等の淺薄なる考は厭ふべきものだけれども、其の希望の
小さいだけに、差したる罪惡を逞うするこいふやうな心配はない、それからまた
好人物だけれども、その代り事業經營の手腕の無いものがある、さういふ人が重
役となつて居れば、部下に居る人物の善惡を識別するの能力もなく、帳簿を査閲
する眼識もない、爲に知らず識らずの間に部下の者に惑まられ、自分から作つた
罪でなくとも、竟に救ふべからざる窮地に陷らねばならぬことがある、是は前者
に比すると稍罪は重いが、併し孰れも重役として故意に惡事をなした者でないこ
とは明かである、然るに夫等二人の者より更に一歩進んで、その會社を利用して

自己の榮達を計る蹈臺にしようとか、利慾を圖る機關にしようとか云ふ考を以て
重役となる者がある、斯の如きは實に宥すべからざる罪惡であるが、夫等の者の
手段としては、株式の相場を釣上げて置かぬと都合が惡いと言うて、實際は有り
もせぬ利益を有るやうに見せかけ、虚僞の配當を行ふたり、又事實拂込まない株
金を拂込んだやうに裝うて、株主の眼を瞞着しようとする者なぞもあるが、是等
のやり方は明かに詐欺の行爲である、而して彼等の惡手段は未だそれ位にては盡
きない、その極端なる者に至ては、會社の金を流用して投機をやつたり、自己の
事業に投じたりする者もある、是では最早窃盗と擇ぶ所がない、畢竟するに此種
の惡事も、結局その局に當る者が道德の修養を缺けるよりして起る弊害で、若し
も其の重役が誠心誠意事業に忠實であるならば、そんな間違は作りたくも造れる
ものでない。

自分は常に事業の經營に任じては、其の仕事が國家に必要であつて、又道理に合するやうにして行きたいと心掛けて來た、假令その事業が微々たるものであらうとも、自分の利益は少額であるとしても、國家必要の事業を合理的に經營すれば、心は常に樂んで事に任じられる、故に余は論語を以て商賣上の『バイブル』となし、孔子の道以外には一歩も出まいと努めて來た、其れから余が事業上の見解としては、一個人に利益ある仕事よりも、多數社會を益して行くのでなければならぬと思ひ、多數社會に利益を與へるには、其の事業が堅固に發達して繁昌して行かなくてはならぬといふことを常に心して居た、福澤翁の言に『書物を著はしても、それを多數の者が讀むやうなものでなくては効能が薄い、著者は常に自己のことよりも國家社會を利すといふ觀念を以て筆を執らなければならぬ』といふ意味のことがあつたと記憶して居る、事業界のことも亦この理に外ならぬも

ので、多く社會を益することでなくては正徑な事業とは言はれない、假りに一個人のみ大富豪になつても、社會の多數が爲に貧困に陷るやうな事業であつたならば如何なものであらうか、如何に其人が富を積んでも、其の幸福は繼續されないではないか、故に國家多數の富を致す方法でなければ不可ぬといふのである。

志以發レ言、言以出レ信、信以立レ志、參以定レ之。

左傳

實業と士道

◎武士道は卽ち實業道なり

武士道の神髓は正義、廉直、義俠、敢爲、禮讓等の美風を加味したもので、一言にして之を武士道と唱へるけれども、其の內容に至りては中々複雜した道德である、而して余が甚だ遺憾に思ふのは、此の日本の精華たる武士道が、古來專ら士人社會のみに行はれて、殖產功利に身を委ねたる商業者間に、其の氣風の甚だ乏しかつた一事である、古の商工業者は武士道に對する觀念を著しく誤解し、正義、廉直、義俠、敢爲、禮讓等のことを旨とせんには、商賣は立ち行かぬものと考へ、彼の『武士は喰はねど高楊枝』といふが如き氣風は商工業者に取つての

禁物であつた、惟ふにこれは時勢の然らしめた所もあつたであらうけれども、士人に武士道が必要であつた如く、商工業者も亦その道が無くては叶はぬことで、商工業者に道德は要らぬなどとは飛んでもない間違であつたのである。

蓋し封建時代に於て、武士道と殖產功利の道と相背馳するが如く解せられたのは、猶ほ彼の儒者が、仁と富とは並び行はれざるもの丶如く心得たと同一の誤謬であつて、兩者共に相背馳するものでないとの理由は、今日既に世人の認容し了解された所であらうと思ふ、孔子の謂ゆる『富と貴とは是れ人の欲する所なり、其の道を以てせずして之を得れば處らざるなり、貧と賤とは是れ人の惡む所なり其の道を以てせずして之を得るも去らざるなり』とは、これ誠に武士道の眞髓たる正義、廉直、義俠等に適合するものではあるまいか、孔子の訓に於て、賢者が貧賤に處して其の道を易へぬといふのは、恰かも武士が戰場に臨んで敵に後を見

せざるの覺悟と相似たるもので、又彼の其の道を以てするに非ざれば、假令富貴を得ることがあつても、安んじてこれに處らぬと曰ふのは、これまた古へ武士が其の道を以てせざれば一毫も取らなかつた意氣と、その軌を一にするものと謂つて宜しからう、果して然らば富貴は聖賢も亦これを望み、貧賤は聖賢も亦これを欲しなかつたけれども、唯彼の人々は道義を本とし富貴貧賤を末としたが、古への商工業者はこれを反對にしたから、遂に富貴貧賤を本として道義を末とするやうになつて仕舞つた、誤解も亦甚しいではないか。

想ふに此の武士道は、啻に儒者とか武士とかいふ側の人々に於てのみ行はるゝものではなく、文明國に於ける商工業者の、據りて以て立つべき道も茲に存在することゝ考へる、彼の泰西の商工業者が、互に個人間の約束を尊重し、假令その間に損益はあるとしても、一度約束した以上は、必ず之を履行して前約に背反せ

ぬといふことは、德義心の鞏固なる正義廉直の觀念の發動に外ならぬのである、然るに我日本に於ける商工業者は、尙ほ未だ舊來の慣習を全く脫することが出來ず、動ともすれば道德的觀念を無視して、一時の利に趨らんとする傾向があつて困る、歐米人も常に日本人が此の缺點あることを非難し、商取引に於て日本人に絕對の信用を置かぬのは、我邦の商工業者に取つて非常な損失である。

凡そ人としてその處世の本旨を忘れ、非道を行うても私利私慾を充たさうとすることがあつたり、或は權勢に媚び諂うても其身の榮達を計らんと欲するは、これ實に人間行爲の標準を無視したもので、斯くの如きは決して其の身、其の地位を永遠に維持する所以の道では無いのである、苟くも世に處し身を立てようと志すならば、其の職業の何たるを問はず、身分の如何を顧みず、始終自力を本位として須臾も道に背かざることに意を專らにし、然る後に自ら富み且つ榮ゆるの計

を怠らざるこそ、眞の人間の意義あり價値ある生活といふ事が出來よう、今や武士道は移して以て實業道とするがよい、日本人は飽くまで大和魂の權化たる武士道を以て立たねばならぬ、商業にまれ工業にまれ、此の心を以て心とせば、戰爭に於て日本が常に世界の優位を占めつゝあるが如く、商工業に於ても亦世界に勇を競ふに至らるゝのである。

◎文明人の貪戾

全歐の事變に就て初め私の豫想は全く外れた、既に其の觀察を誤つた私は、將來も亦見込違ひをするであらうと恐懼して居る、併しながら私の觀察の誤つた所以は、私の豫想以上に暴虐の人があつたからである、謂ゆる『一人貪戾なれば、一國亂を作す』といふ古訓が、事實として全歐洲に現はれて來たからである、文

明の世には有り得べからざるものとの想像が過誤の觀察となつたのである、果して然らば、私の智の到らざりしが爲でもあらうが、私は却つて文明人の貪戾なる結果ではなからうかと、冷笑せざるを得ないのである。

此の事變の終局は如何になるであらうか、私の如き近眼者流には豫言することは出來ないけれども、結局は列强並び相疲るゝか、或は一方の威力が衰へて、其極或る條件の下に終局を見るであらうか、歷史家は、百年を經ると地圖の色が變ると言うて居るが、我々は又之に由つて、商工業の勢力の移りゆく樣を見ねばならぬ、將來の商工業は如何に變化するであらうか、其の變化に就て、我々は如何なる覺悟を以て之に應ずべきであらうか、我々の考慮すべき所、用意すべき點は詰り此所に在るのだ、私は政治上若くは軍事上に就て述ぶることを好まぬ、また其の智識をも持たぬのである、故に今私の言はんと欲する所は、單に商工業に關

する方面に限らるゝのであるが、今後地圖の變化に伴ふ商工業勢力範圍の變化に就て、適切なる準備と實行の責任とは、未來の當事者に在るのである、而して此の未來の當事者なるものは、現時の青年を除いて外にない、青年たる者は今日よりして審思熟慮、之に對する策を講ずべきである。

何れの國家に於ても、自國の商工業を發達せしめんとするには、海外に我が國産の販路を求め、人口の增殖するに於ては領土を擴むることを講ずるのみならず様々なる策略を以て自己の勢力の增大を圖るのである、現に歐洲列强が五大洲に雄飛して居る所以は、全く是等の事情に由るものであつて、優越なる位地を占むるものは、將に優越なる國家と稱せらるゝのである、彼の獨逸皇帝今回の行動の如き、此點より企圖せられたるものであると思はれる、從來皇帝が內地の殖産に海外の殖民に留意せらるゝことは容易ならざるものにて、若しも少しく其點に就

て注意するならば、何人と雖も、皇帝が何故に此くまで仔細に心を勞せられるかと云ふことを感ぜずには居られまい、例へば、英佛に對する商工業の競爭は勿論日露戰後、日本雜貨が各地に歡迎さるゝを見れば、直ちに之を模造する、總じて學術技藝には能ふ限りの保護と便利とを與へ、商工業は常に政治兵備と相聯絡し中央銀行の如きも力を盡して商工業の便宜、資金の融通を計るといふやうに、如何に彼等上下一致して富國に從事して居るかゞ窺知し得られる、又その學問に於ても化學、發明、技術、精妙、實に行屆くことは一通りではない、それは今回の戰亂の爲に、遠き我國の如きをして、藥品染料等の缺乏に窮せしめたる事實に見るも、彼國の力が世界の隅々まで及んで居ることが分かる、故に自國の擴大のみを企圖する貪戾心は實に厭ふべきであるが、官民一致その國の富强を務むるの努力は感服の外はないのである。

顧つて我國の商工業を見るに、多くは不統一にして振はず、殊に戰亂の影響を受け、生糸の値は下落し、綿糸綿布の販路は澁滯し、總じて取引は萎靡し、有價證券の價は下落し、新たなる事業は起らざるの狀態にある、併し早晩是等は恢復することも豫想に難くないのであるから、此際一時の困難は堪へ難くとも、當業者は大に勇氣を起さねばならぬ所である、又一方には此の事變は大に乘ぜざるべからざる好時機と思ふ、今日我が實業家は目前の不景氣に畏縮するやうであるけれども、其れは甚だ無氣力の行爲である、唯その著目を誤らぬやうにして戰中十分なる研究を積み、漸次實物の效果のあるやうに努めて行きたいのである、殊に支那に對する商工業の如きは、境は接近し居る、人情風俗共に歐米人に比すれば緣故最も深いのである、然るに其の關係に於ては、往々にして他列强に比して大に遜色あるは實に心細い極みである、吾人は須らく進んで支那の富源を開發し

其の產業を進め、其の販路を擴めて、通商上の利益を增加するやうに心掛けねば爲らぬ、我が國民の今日まで支那に對する商工業經營の態度を見るに、兎角個個別々であつて、其の間に少しも聯絡がない、獨逸の政治經濟機關が統一して密接な關係を保つて居るのを見るにつけても、我が國民が此の歷史的に於ても、將た人種的に於ても、幾多の便宜を有する國柄なるに關はらず、彼等の後へに瞠若たるやうではならぬ、而して此の覺悟は特に我が青年に對して最も望ましき所である、何うか今日の青年諸氏は斯る所に注目して力を入れて貫ひたいのである。

◎相愛忠恕の道を以て交はるべし

日支間は同文同種の關係あり、國の隣接せる位置よりするも、將た古來よりの歷史よりいふも、また思想、風俗、趣味の共通せる點あるに徵するも、相提携せ

ざるべからざる國柄なり、然らば奈何にして提携の實を擧ぐべきか、其の方策他なし、人情を理解し、己の欲せざる所は之を人に施さず、謂ゆる相愛忠恕の道を以て相交はるにあり、即ち其の方策は論語の一章に在りと謂ふべきである。

商業の眞個の目的が有無相通じ、自他相利するにある如く、殖利生産の事業も道德と隨伴して、初めて眞正の目的を達するものなりとは、余の平素の持論にして、我國が支那の事業に關係するに際しても、忠恕の念を以て之に蒞み、自國の利益を圖るは勿論ながら、併せて支那をも利益する方法に出づるに於ては、日支間に眞個提携の實を擧ぐることは、決して難い事ではない。

之に就き先づ試みるべきは開拓事業であつて、即ち支那の富源を拓き天與の寶庫を展開して、其の國富を增進せしむるに在る、而して之が經營の方法は、兩國民の共同出資に依る合辦事業となすが最良法である、獨り開拓事業に止まらず、

其他の事業に於ても亦その組織は日支合辦事業とするのである、斯くするに於ては日支間に緊密なる經濟的連鎖を生じ、從つて兩國間に眞個の提携を爲し得るのである、余の關係せる中日實業會社は、此の意味に於て發起設立せられたるものにて、其の成功を期せんとする所以も亦此に存するのである。

余が史籍を通じて尊敬し居る支那は、主として唐虞三代より後きも殷周時代であつて、當時は支那の文化最も發達し、光彩陸離たる時代である、但し科學的智識に至りては、當時の史籍に揭げられたる天文の記事の如き、今日の學理に合せずと言はるれども、百事を現在の支那に比較して、今日の昔時に及ばざる感あるは當然のことである、其の後、西東漢、六朝、唐、五代、宋、元、明、淸に及び謂ゆる二十一史にて通覽せる所に依るも、各朝に大人物の輩出せるは言はずもがな、秦に萬里の長城あり、隋に煬帝の大運河あり、當時是等の大事業の目的が

那邊に存せしかは暫く措き、其の規模の宏大なる、到底今日の企て及ぶ所ではない、されば唐虞三代より殷周時代の絢爛たる文華を史籍に依りて窺ひ、これが想像を逞しうして、今次（大正三年春）支那の地を蹈み、實際に就き民情を察するに及び、恰かも精緻巧妙を極めたる繪畫によりて美人を想像し、實物に就き親しく之を見るに方り、始めて其の想像に及ばざるの恨を懷くと等しく、初め想像の高かりしだけ失望の度も深く、逆施倒行とも言ふべきか、余をして儒教の本場たる支那の到る處にて、屢々論語を講ずるの奇觀をさへ呈せしめたのである。

就中余の感を惹きしは、支那に於ては上流社會あり下層社會あるに拘はらず其の中間に於ける國家の中堅をなす中流社會の存在せざる事と、識見人格共に卓越せる人物が少いと云ふ譯ではないけれども、國民全體として觀察するときは、個人主義利己主義が發達して、國家的の觀念に乏しく、眞個國家を憂ふるの心に

缺けたることにて、一國中に中流社會の存せざると、國民全般に國家的觀念に乏しきとは、支那現今の大缺點なりと謂ふべきである。

◎天然の抵抗を征服せよ

世界文明の進歩に伴ひ、人智を以て天然の抵抗を征服し、海にも陸にも種々交通の便利を加へて、其の距離を短縮することは實に驚くばかりである、往昔支那に於ては天圓地方と稱して、我々の住む此の大地を方形のものと思惟せしのみならず、自國以外には殆んど他國の存在を認めなかつたのである、我國とても當初は斯かる偏狹なる見解に依りて誘道啓發せられたのであるから、會々日本以外の國といへば、直ちに唐天竺を聯想するのみであつて、更に世界の何物たるを知らなかつたのである、されば五大洲の存在などいふことに至りては、夢想だも及ば

なかつたのである、現に余の幼時に聞ける童話中にも、其の左右の翼を擴げると
きは長さ三千里にも達するといふ大鵬でさへも、尙ほ且つ世界の涯際を見ること
が出來ないのであると說いた程であつた。

さて其の如く世界は廣大無邊のものなれば、迚も我々の人智では容易に之を究
むることの出來るもので無いとして居たのである、然るに文明の進歩と共に交通
機關が發達して來た爲に、地球の面積は漸次に減縮せられ、最近の半世紀間に於
ては、殆んど隔世の感がある、顧みれば千八百六十七年、那波翁第三世が在位の
時に當り、佛國巴里に世界大博覽會の開かるゝに際し、我が德川幕府よりは將軍
の親弟德川民部大輔を特命使節として差遣せられ、余は隨行員の一人として渡歐
したのであるが、當時一行の者は橫濱より佛國郵船に乘り印度洋及び紅海を經て
蘇士の地峽に到りしに、佛國人レセップ氏の經營に係る同所開鑿の一大工事は、

既に着手せられて居たけれども、未だ成就しなかつたが爲め、一行は船を棄てゝ
地峽に上り、鐵道に依りて埃及を橫斷し、「カイロー」を經て「アレキサンドリヤ」
に出で、再び乘船して地中海を航し、橫濱出帆以來五十五日にして、初めて佛國
の「マルセーユ」に到着したのであつた、斯くて翌年の冬期に歸朝する時に其所
を過ぎたが、尙ほ運河の工事は竣成の運びに至らなかつた。

其の後(千八百六十九年十一月)該運河が開通して、諸國の艦船が通航を許さる
るや、歐亞の交通に一生面を開き、兩者間の貿易に、航海に、軍事に、外交に一
大變革を來したのである。

これと同時に各國艦船は、爾來益々其の形態を大にして其の速力を加へたから
太西洋は言を竣たず、太平洋の面積も亦漸く減縮せられた事さへあるに、更に進
んで西伯利亞橫斷鐵道が竣工したので、歐亞の交通、東西の聯絡上に一新紀元を

開き、四海比隣の實が漸くにして擧らんとして居る。

然るに爰に遺憾なりしは、米大陸が其の半腹に帶の如き一地峽の存するに由り地勢は爲に蜿蜒長蛇の如く南北に走りて徒らに太西太平兩海洋の聯絡を遮斷することであつた、而して此の障壁を除却することに就ては、レセップ氏以下何れも多大の辛酸を嘗められたのであるけれども、不幸にして比々失敗し去つたのであつた、併し其儘に終ることはあるまいと思つて居ると、我が東隣友邦の雄大なる經營に依りて、遂に巴奈馬地峽開鑿の一大工事が竣成し、南北の水は乃ち相通じ東西の半球は全く比隣と化し去らんとしつゝある、東洋の諺に命長ければ恥多しと云ふけれども、輓近五十年間に於ける世界交通の發達と、海運の面積の減縮とは斯の如く顯著なるものがあつて、前後殆んど別乾坤の觀あるを思へば、身、昭代に生れたる餘慶として、長壽の寧ろ幸福なりしを喜ぶのである。

◎模倣時代に別れよ

度々識者が力說する通り、我が國民の思想には忌むべき弊習がある、それは即ち外國品偏重の惡風である、外國品だからとて別段排斥する必要がないやうに之を偏重するの餘り內地品を卑下する理由もない筈である、然るに舶來品といへば總て優秀なものばかりとの觀念が、深く國民の上下に普及して居るのは誠に慨嘆に堪へない、尤も日本の文明は最近の發達で、而かも歐米諸國からの移殖に負ふ所が頗る多いために、曾ては歐化主義の流行に苦しみ、今も猶ほその餘弊として、此の舶來品愛重の勢をなして居ることゝ思はれるけれども、維新以來早くも半世紀にならうとする今日、且つ又東洋の盟主、世界の一等國を以て任じて居る今日の日本國たるもの、何時まで歐米心醉の夢を見て居るのであらう、何時ま

で自國輕蔑の不見識を敢てする積りであらう、實に意氣地のない話である、外國の「レッテル」が貼つてあるから此の石鹸は宜いぞと威かされたり、外國品だから此の「ウヰスキー」を飲まなければ、時勢後れの人間に見られると怖れるやうでそれで獨立國の權威と大國民の襟度が如何して保たれて行かれよう、私は實に國民の大自覺を望むのである、我々は今日唯今、心醉の時代と袂別せねばならぬ、模倣の時代から去つて、自發自得の域に入らねばならぬ。

有無相通は經濟の原則とはいふものゝ、私は徒らに排外思想を鼓吹するものではない、物に一得一失は動もすれば伴ふもので、先年戊申詔書を降された時も、これを極端非理な消極主義に穿き違へた人々が多く、當路者が御大旨の徹底に惱まされたことがある、此の國産奬勵の宣傳をも極端な消極主義、排外主義と取られては、獨り發起人等の迷惑なるのみならず、延いては國家の大損失を招く虞が

ある、有無相通ずとは數千年前から道破された經濟上の原則で、此の大原則に反して經濟の發展は企圖せられる筈がない、一縣にして佐渡からは金を産し、越後からは米を産する、一國にすれば、臺灣からは砂糖が出るし、關東地方からは生絲が出る、更に國際間に擴大して見ると、亞米利加の小麥、印度の綿花の如く、それ〴〵地勢に依つて其の産物を異にするのであるから、我々は彼の小麥紛を食し、彼の綿花を購ひ、そして我は生絲、綿絲を賣つて行くべきである、この點は特に注意して、我國に適する物を作り、適せない物を仕入れることを過らぬやうにせねばならぬ。

次に我々は奬勵會の事業を選擇して置く必要がある、奬勵は其の聲ばかりでも効益は少ないが、折角會組織にしたのであるから、是非目的を貫徹する爲に實際の事業に着手し、範を天下に示すべきである、目下の所では會報を發行する以

外、具體的に決定したものはないが、規則書にもある通り、今後は國産の調査研究、共進會の開催、講話會の開催、商品陳列場の完備、一般の質疑應答、輸出奬勵策等を實施して行くのである、特に研究所の設立、産業上の注意、市場又は製品の紹介、試驗分析、證明の依頼に應ずることなどは裨益する所大なるものがあらうと思ふ、而して事業の成否は一に係つて各人の雙肩にあるのだから、御互にこの會の發展と利用とに力を注がねばならぬ。

最後に當局者に一言して置きたい事は、奬勵は大に之を努めねばならぬが、不自然不相應の奬勵を行へば終に無理が出來る、親切なやり方も却つて不親切な結果となり、保護した積りが干渉束縛となる、殊に商品の試驗及び紹介をする際には、私利私情を離れて一に邦家の爲を念ひ、公平と親切とを忘れざらん事を切望して置く、更に又日本品使用の機運が動いたのを奇貨として、詰らぬ物を粗製濫造し、忠良なる國民を欺瞞し、一時の私腹を肥さんと試むる商賣人もあらう、此の如きも亦國産の發達を阻害すること尠少でないから、相警めて斯る不逞漢の輩出を防がねばならぬのである。

◎此にも能率增進法あり

我々が始終——殊に私などは、其れに就てて恥入つて、諸君にも始終迷惑をかけるが、此物の切盛のつかぬ爲に、無駄な時間を費す、之がどうも事物の進むほど注意せねば爲らぬことゝ思ふ、從つて之が極端に行くと、能率が大變に惡くなる、能率の惡いといふことは職工か何かにある語ですが、職工ばかりでは無い、通常の事務を處する人でも、チヤンと時の極りが充分附いて、此の時間に是れだけの事をするといふことを遲滯なく完全に遂げて行くことが出來ると、謂はゞ人

を多分に使はぬでも、仕事は澤山に出來て來る、即ち能率が宜くなる、事務に於ても尙ほ然りと思ふ、自身にさう思ふが、さらば日本の諸君が、私ばかりが惡くて他の方は寔に其の權衡を得て、一日何時間働く、其の働く時間は仕事に從事をして居る分量が、寔に完全に、時計の刻むが如くやれ得るかと云ふと、決して爾うでない、或は使はぬでも宜い人を大に使ひ、一度で濟むことを三度も人を走らせたり、さうして用は左まで〻ない、費府でワナメーカーが私を接待して呉れた、其の時間の遣ひ方などを見て、あゝ感心なものだ、成程斯うやると寔に少い時間にチヤンと多くの事が出來て、其日の仕事が完全に屆くと思うて、頗る敬服したのである、既にテーラーといふ人が斯ういふ手數を省くことに就て大に說をなして、或る雜誌に池田藤四郎といふ人が之を書いてある、能率を增進するといふ論であるが、私は初め工場の職工か何かに就て言つたものとばかり思うて居た

所が左樣でない、もう日々お互の間に始終ある、ワナメーカーが私を待遇した有樣を見ると、何も別に變つたことでもないが、丁度「ビツツブルグ」の汽車が五時四十分に費府に着く、着いたならば自働車を出して置く、六時までに私の店に來られるから、「ホテル」に寄らずに直ぐ來て呉れ、斯ういふ案內であつた、そこで指圖通り費府に着くと宿にも寄らず、直ぐ自働車で行くと、六時二分か三分に着いた、先生は店に待つて居つて、直に私を案內して、先づ店の有樣を一通り見せた、寔に目を驚かすやうな大きな店で、入口には大きな兩國の國旗が建て立派な華電燈を盛んに點じて、而かも其日に來た多數の客が未だ歸らずに待つて居つたから、何か大きな劇場の「ハネ」にでも出會つたやうな鹽梅に群集をなして居る、其所を主人が案內して連れて歩く、先づ下の方の陳列場をズツと通りながら觀て、それから「エレベーター」で二階へ上ると、先づ第一に見せたのは料理

場、すつかり掃除して綺麗になつて居たが、是は上等の客の仕出をする所、其次は普通の客の仕出をする所、「コツク」の有様は斯うである、其次には祕密室といつて、何か店のことに就て祕密な協議をする所であるが、四五千人の會議が出來るといふ程の廣さである、それから教育をする場所、店の人に極く當用の教育を與へる所、是等の諸所を見せた時間が驕て一時間位、それが濟んで七時頃に私が「ホテル」に歸る時に、ワナメーカーが明朝は八時四十五分にお前を訪ねる、それなら朝餐は濟むだらう、——濟みます、丁度翌朝の八時四十五分にキチンと來た是から大分長い話をして、正午頃まで話をして宜いか、宜しいと云ふからして、頻りに日曜學校に力を入れた理由は斯樣である、一體お前の出身はどういふ人であると云ふやうなことから、段々談話が込入つて、つい其爲に一時間も彼は餘計豫期したよりも長き話をしたかと思ふ、晝餐になるから私は歸る、二時に來るから、夫迄に支度をして待つて呉れ、それから又二時にキチンと來て、今度は日曜學校の會堂に案内される、其の會堂は當人の建てたものか否か知らないが、中立派な會堂で、總體では二千人も入るといふ、大勢の會員が居る、何時も此通りで、別に貴方が來たから多くの人を集めたのではないと云つて居た、牧師が聖書を講演し、それから讃美歌がある、それが終るとワナメーカーが私を紹介的の演說をした、それから私にも日曜學校に就て感じたことを言へといふことで、私も演說をした、更にそれに向つてワナメーカーが——此時には私も少し弱りましたが——是非孔子教を止めて基督教に宗旨變をせよと直接談判を大勢の前で迫られた、是には私も返答に苦んだ、それが終ると直ぐ隣りの婦人の聖書研究會に行つて演說し、次で一二丁隔つた所の勞働的種類の人が集つて、聖書を研究する所に行き、彼は東洋から斯ういふ老人が來たから、是非握手したら宜からうと云つた

ので、四百人も居た殘らずに、而かも向ふは勞働者であるから、強く握られるので手が痛くなる位であつた、やがて五時半頃になつた、六時に立つて田舍へ行かねばならぬ約束があるので、一緒に旅宿の前まで來て別れる時に、是非もう一遍會ひたいが、何とか途は無からうかといふ話、――紐育には何日行く、三十日に行つて來月四日まで滯在して居る、然らば私は二日に紐育に行く用事がある、其時もう一遍會はう、何時か、午後の三時には立つて此地に歸らねばなるぬ、然らば二時から三時までの間に紐育の貴方の店に行かうと約束し、二日の二時半、三時少し前位、少し遲くなつて遣損つては大に困ると思ひ、大急ぎで行くと、直ぐさまお前よく來て呉れた、是で滿足だ、私も滿足である、實はお前に御馳走は出來ぬから書物を進げたいと云つて、リンコルンの傳記、ゼネラル、グランドの傳記その他のものを與へ、且つ簡單に兩氏の崇高なる人格を語り、自分もグランド

將軍歡迎委員長であつたことなどを語り合ひて別れたが、其の切盛に一も無駄がない、話も亦適切である、私は實に敬服した、時間を無駄に使はぬこと斯く如くなれば、例の能率が如何にも增進するであらう、別に物を拵へる譯ではないが詰り我々が時間を空費してるのは、丁度物を製作する場合に手を空くしてると同じことであるから、是はお互に注意して人間を無駄に使はぬは勿論のこと、我れ自身をどうぞ無駄に使はぬやうに心懸けたいと思ふ。

◎果して誰の責任ぞ

世人動もすれば維新以後に於ける商業道德は、文化の進歩に伴はずして却つて衰へたと云ふ、併しながら余は何故に道德が退歩、若くは頽廢したか、其の理由を知るに苦しむ者である、之を昔日の商工業者に比すれば、今日の商工業者と其

の孰れが道德觀念に富み、孰れが信用を重んずるであらうか、余は今日を以て遙かに昔日に優るものゝ斷言するに憚からぬけれども、今日他の事物の進歩した割合に道德が進んで居らぬとは、既に前說の如くであるから、余は必ずしも世人の說を駁する譯ではない、唯吾人の此間に處するものは、斯の如き世評の生ずる理由を詮索し、一日も早く道德をして物質的文明と比肩せしめ得るの程度に向上させなくてはならぬ、それは前に述べたるが如き方法の下に道德を講ずるのが先決問題であらう、併しそれとても特別の工夫方法を要する譯でなく、唯日常の經營に於て左樣心掛けて居れば足るのであるから、左まで六ケ敷いものではない。

維新以來物質的文明が急激なる發達をなしたるに反し、道德の進歩がそれに伴はなかつたので、世人は此の不釣合の現象に著しく注目して、商業道德退歩といふのであるとして見れば、仁義道德の修養に心を用る、物質的進歩と互角の地

位に進ませるが目下の急務には相違ないが、一面から考察して見ると、單に外國の風習ばかりを見て、直ちにこれを我國に應用せんとすれば、或は不可能を免れぬこともある、國異なれば道義の觀念も亦自ら異るものであるから、仔細に其の社會の組織風習に鑑み、祖先以來の素養慣習に稽へ、其の國、其の社會に適應する所の道德觀念の養成を務めなければならぬものである、一例を擧ぐれば、『父召せば諾なし、君命じて召せば駕を待たずして行く』とは、即ち日本人が君父に對する道德觀念である、父召せば聲に應じて起ち、君命じて召すことあれば、場合を問はずして直ちに自ら赴くことは、古來日本人士の間に自然的に養成されたる一種の習慣性である、然るに之を個人本位の西洋主義に比較すれば、其の輕重は非常なもので、西洋人の最も尊重する個人の約束も、君父の前には犧牲として敢て顧みぬも宜いといふことになる、日本人は忠君愛國の念に富んだ國民であるこ

稱揚さるる傍から、個人間の約束を尊重せぬとの誹謗を受くるのも、要するに其の國固有の習慣性が然らしめたので、我と彼では其の重んずる所のものに差異がある、然るに其の因つて來る所以を究めずして、徒らに皮相の觀察を下し、一概に日本人の契約觀念は不確實である、商業道德は劣等であると非難するは、餘りに無理であるこいふより外は無い。

斯く論ずればとて、余が日本の商業道德の現在に滿足せぬことは勿論である、兎に角近頃の商工業者の間に、或は道德觀念が薄いとか、或は自己本位に過ぎるこかいふ評を加へられることは、當業者の相互の警戒せねばならぬこではあるまいか。

◎功利學の弊を芟除すべし

日本魂、武士道を以て誇りとする我國の商工業者に道義的觀念の乏しいこ云ふことは、實に悲むべきことであるが、抑も其の由つて來るところを繹ぬれば、從來因襲する教育の弊であるこ思ふ、予は歴史家にあらず又學者にあらざれば、遠く其の根源を究むることは出來ないけれども、彼の『民可レ使レ由レ之、不レ可レ使レ知レ之』こいふ、朱子派の儒教主義は、近く維新前まで文教の大權を掌握せる林家の學に依て其の色彩を濃厚にし、被治者階級に屬する農工商の生産界は、道德の天則外に放置せらるゝと共に、己れ亦自から道義に束縛せらるゝの必要なしと感ずるに至つた。

此の學派の師宗朱子その人が、唯大學者といふまでにて、實踐躬行、口に道德を說き、身に仁義を行ふ底の人物でなかつたから、林家の學風も、儒者は聖人の學說を講述する者、俗人は之を實地に行ふべきものとし、說く者こ行ふ者との區

別を生じ、之が結果として、孔孟の謂ゆる民即ち被治者階級に屬する者は、唯だ命惟れ奉じて、一村一町の公役行事を怠らざれば足るといふ卑屈根性を馴致し、道德仁義は治者の爲すべきこと、百姓は政府より預りたる田畑を耕し、町人は算盤の目をせゝつてさへ居れば能事了るといふ考へが、習ひ性をなして國家を愛するとか、道德を重んずるとかいふ觀念は全く缺乏したのである。

鮑魚の市に入るものは自ら其の臭を知らずといへば、斯る數百年の惡風に養はれ、謂ゆる糞厮の臭きを忘れたるものを薫化し、陶冶し、天晴有道の君子的人物となすは、固より容易のことでは無いのに、歐米の新文明の輸入は、此の道義的觀念の缺乏に乘じ、翕然として功利の科學に向はしめ、愈々其の惡風を助長することゝなつた。

歐米にも倫理の學は盛である、品性修養の聲も甚だ高い、併し其の出發點が宗

教によりて、我國の民性と容易に一致し難き所があるより最も廣く歡迎せられ、最も大なる勢力となつたのは、此の道德的の觀念では無くして、利を增し產を興すに覿面の效果ある科學的智識、即ち功利の學說である、富貴は人類の性慾とも稱すべきではあるが、初めより道義的觀念の缺乏せる者に向つて、敎ふるに功利の學說を以てし、薪に油を注いで其の性慾を煽るに於ては、其の結果は蓋し知るべしではないか。

往時の下級生產者より出でて、天晴身を立て家を興し、一躍具瞻の地位に進みたる人も固より尠くないが、是等の人々は果して道德仁義に終始し、正路に步し公道を進み、俯仰天地に作るなきの心事を以て、能く今日に至つた者であらうか關係の會社銀行等の事業を盛大ならしむべく、晝夜不斷の努力を盡すは、實業家として洵に立派のことである、其の株主に忠なる者と稱するも不可なしであるけ

れども、若し會社銀行の爲に盡す精神が、由つて以て自ら利せんとする謂ゆる利己の一念に止まりて、株主の配當を多くするのは自家の金庫を重からしむる爲めなりとせば、若し會社銀行を破産せしめ、株主に缺損を與ふるを以て自己の利益が多いといふ場合に際會したならば、或は之を忍ぶやも測られない、孟子の謂ゆる『奪はずんば饜かず』とは即ち是である。

又富豪巨商に仕へて、一意主家の爲に盡瘁する者の如きも、唯その事蹟より見れば、克く仕ふる所に忠なる者といふことは出來るが、其の忠義的行爲が、全く自家損得の打算より發し、主家を富ましむるは自ら富む所以、番頭手代と見下げらるゝは面白からざるも、實際の收入は遙かに尋常事業家に優るものあれば、我は名を捨て得を取るなりとの心事より出でたるものなるときは、其の忠義振りも謂する所は利益問題の四字に止まり、同じく道德の天則外にあるものと云うて差

支あるまい。

然るに世人は此種の人物を成功者として尊敬し羨望し、青年後進の徒も亦これを目標として、何とかして其壘を摩せんとするに腐心する所より、惡風滔々として底止するところを知らざる勢となつて居る、斯く云へば、我が商業者の總ては皆不信背德の醜漢のやうであるが、孟子も『人の性は善なり』と言へる如く、善惡の心は人皆之れあれば、中には君子的人物であつて、深く商業道德の頽廢を慨し、之が救濟に努力し居る者も尠くないが、何にせよ既往數百年來の弊習を遺傳し、功利の學說によりて惡き方面の智巧を加へたる者を、一朝有道の君子たらしむるは容易に望み得らるべきでは無い、去迎それを此儘に放任するは、根なき枝に葉を繁らし、幹なき樹に花を開かしめんとするものにて、國本培養も商權擴張も、到底得て望むべきに非ざれば、商業道德の骨髓にして、國家的、寧ろ世界的

に直接至大の影響ある、信の威力を闡揚し、我が商業家の總てをして、信は萬事の本にして、一信能く萬事に敵するの力あることを理解せしめ、以て經濟界の根幹を堅固にするは、緊要中の緊要事である。

◎此の如き誤解あり

由來競爭は何物にも伴ふもので、その最も激烈を極むるものは競馬とか、競漕とかいふ場合である、其の他朝起るにも競爭がある、讀書するにも競爭がある、また德の高い人が德の低い人から尊重されるにも、それ〳〵競爭がある、けれども是等後の方のものに於ては、餘り激烈なものは認めない、然るに競馬競漕となると、命を懸けても構はないといふ程になる、自己の財產を增すに就ても是と同樣で、激烈なる競爭の念を起し、彼よりも我に財產の多からんことを欲する、其

極、道義の觀念も打忘れて、謂ゆる目的の爲には手段を擇ばぬといふやうにもなる、即ち同僚を誤り、他人を毀ち、或は大に自己を腐敗する、古語に『富をなせば仁ならず』といふのも、畢竟さういふ所から出た言葉であらう、アリストートルは、『總ての商賣は罪惡なり』と言つて居るさうであるが、それは未だ人文の開けぬ時代のことで、如何に大哲學者の申分とあつても、眞面目には受取れない、併し孟子も『富をなせば仁ならず、仁をなせば富まず』と言つて居るから、等しく味はふべき言葉である。

思ふに此の如く道理を誤るやうになつたのは、一般の習慣の然らしめた結果といはなければならぬ、元和元年に大阪方が亡び、德川家康が天下を統一し、武を偃せて復た之を須ゐない時代となつて以來、政治の方針は一に孔子教より出て居つたやうである、その以前、支那或は西洋に相當の接觸もしたのであるが、偶

偶「ゼシュイット」教徒が、日本に對して恐るべき企を持つて居るかに見えたことがあつた、或は宗教によつて國を取るのを其の趣意として居るなどといふ書面が和蘭から來たといふやうなことから、海外との接觸を全く絶つて、僅か、長崎の一局部に於てのみ之を許し、内は全く武力を以て之を守り治めた、而して其の武力を以て治める人の遵奉したのは實に孔子教であつた、修身、齊家、治國、平天下の調子で治めるといふのが幕府の方針であつた、故に武士たる者は謂ゆる仁義孝悌忠信の道を修めた、さうして仁義道德を以て人を治める者は、生産利殖などに關係する者でない、即ち『仁をなせば富まず、富をなせば仁ならず』を事實に於て行つたのである、人を治める方は消費者であるから生産には從事しない生産利殖のことをするのは、人を治め、人を教ふる者の職分に反するものとして謂ゆる武士は喰はねど高楊枝といふ風を保つた、人を治める者は人に養はるゝも

のなり、故に人の食を喰むものは人の事に死し、人の樂を樂む者は人の憂を憂ふといふが彼等の本分と考へられて居た、生産利殖は仁義道德に關係のない人の携はるものとされて居たから、恰かも總て商業は罪惡なりと言はれた昔時と同樣の狀態であつた、是が殆んど三百年間の風を成した、其れも初めは極く簡單な方法で宜かつたが、次第に智識は減じ氣力は衰へ、形式のみ繁多になり、遂に武士の精神廢り、商人は卑屈になつて、虚僞横行の世の中となつたのである。

教育と情誼

◎孝は強ふべきものに非ず

論語の爲政篇中に、『孟武伯問レ孝、子曰、父母唯其疾之憂』、また『子游問レ孝、子曰、今之孝是謂二能養一、至二於犬馬一、皆能有レ養、不レ敬何以別乎』、尙ほ此外にもある如く、孝夫子は孝道の事に就て屢々說かれて居る、併し親から子に對して孝を勵めよと强ゆるのは、却つて子をして不孝の子たらしむるものである、私にも不肖の子女が數人あるが、それが果して將來如何なるものか、私には解らぬ、私とても子女等に對して、時折『父母は唯その疾を之れ憂ふ』といふやうな事を說き聞かせもする、それでも決して孝を要求し孝を强ゆるやうな事は致さぬ事にして

居る、親は自分の思ひ方一つで、子を孝行の子にしてもしまへるが、又不孝の子にもしてしまふものである、自分の思ふ通りにならぬ子を、總て不孝の子だと思はゞ、それは大なる間違で、皆能く親を養ふといふだけならば、犬や馬の如き獸類と雖も、猶ほ且つ之を能くする、人の子としての孝道は、斯く簡單なるものではあるまい、親の思ふ通りにならず、絕えず親の膝下に居て親を能く養ふやうなことをせぬ子だからとて、それは必ずしも不孝の子でない。

斯ることを述べると、如何にも私の自慢話のやうになつて恐縮であるが、實際の事ゆゑ、憚らずお話しする、確か私の二十三歲の時であつたらうと思ふが、父は私に向ひ『其許の十八歲頃からの樣子を觀て居ると、どうも其許は私と違つた所がある、讀書をさしても能く讀み、又何事にも悧發である、私の思ふ所から言へば、永遠までも其許を手許に留め置いて、私の通りにしたいのであるが、そ

れでは却つて其許を不孝の子にしてしまふから、私は今後其許を私の思ふ通りのものにせず、其許の思ふまゝに爲せることにした』と申されたことがある、如何にも父の申された如く、その頃私は文字の力の上から云へば、不肖ながら或は既に父より上であつたかも知れぬ、また父とは多くの點に於て、不肖ながら優つた所もあつたらう、然るに父が無理に私を父の思ふ通りのものにしようとし、斯くするが孝の道であると、私に孝を強ゆるが如きことがあつたとしたら、私は或は却つて父に反抗したりなぞして、不孝の子になつてしまつたかも知れぬ、幸ひに斯ることにもならず、及ばぬうちにも不孝の子にならずに濟んだのは、父が私に孝を強ひず、寛宏の精神を以て私に臨み、私の思ふまゝの志に向つて私を進ましめて下された賜物である、孝行は親がさして呉れて初めて子が出來るもので子が孝をするのでは無く、親が子に孝をさせるのである。

父が斯る思想を以て私に對して下された爲め、自然その感化を受けたものか、私も私の子に對しては父と同じやうな態度を以て臨むことにして居る、私が此く申すと少し烏滸がましくはあるが、何れかと云へば、父よりも多少優れた所があつたので、父と全く行動を異にし、父と違つた所があつて、父の如くになり得なかつたのである、私の子女等は將來如何なるものか、素より神ならぬ私の斷言し得る限りでないが、今の所では、兎に角、私と違つた所がある、この方は、私と父とが違つた違ひ方と反對で、何れかと申せば劣る方である、併し此く私と違ふのを責めて、私の思ふ通りになれよ、と子女等に強ひて試みたところで、それは斯く注文して強ひる私の方が無理である、私の通りになれよ、と私に強ひられても、私のやうになれぬ子女は、どうしても成れぬ筈のものである、然るに猶ほ強ひて、子女等を總て私の思ふ通りにしやうとすれば、子女等は私の思ふ通りに成

り得ぬだけのことで、不孝の子になつてしまはねばならぬ、私の思ふ通りにならぬからとて、子女等を不孝の子にして仕舞ふのは忍ぶべからざる事である。

故に私は子に孝を爲せるのでは無い、親が孝を爲せるやうにして遣るべきだと云ふ根本思想で子女等に臨み、子女等が總て私の思ふやうに爲らぬからとて、之を不孝の子だとは思はぬことにして居る。

◎現代教育の得失

昔の青年と今の青年とは、昔の社會と今の社會と異なるが如くに異なつて居る余が二十四五歳の頃、即ち明治維新前の青年と現代の青年とは、其の境遇、其の教育を全然異にして居るが爲めに、何れが優り何れが劣つて居るといふことは、一口には言ひ現はせない、而かも一部の人士は、昔の青年は意氣もあり、抱負も

ありて、今の青年より遙かに偉かつた、今の青年は輕浮で元氣がないと云ふが、一概にさうばかりも言へまいと思ふ、何となれば、昔の少數の偉い青年と現今の一般青年とを比較し來りて、彼れ是れ言ふことは少しく誤つて居る、今の青年の中にも偉い者もあれば、昔の青年にも偉くない者もあつた、維新前の士農工商の階級は極めて嚴格であつた、武士の中にも上士と下士といふが如き階級があり、百姓町人の間にも、代々土地の素封家で庄屋を勤めて居るやうな家柄と、普通の百姓町人とは、自ら其の氣風教育に異なる所があつた、斯の如き有樣であつたから、昔の青年といつても、武士と上流の百姓町人と、一般の百姓町人とは、其の教育も異つて居たのである。

昔の武士及び上流の百姓町人は、其の青年時代に多く漢學教育を受けたもので、初めは小學とか孝經とか近思錄とか、更に進んでは論語、大學、孟子等を修

め、一方身體の鍛錬と共に武士的精神を鼓吹したものである、而して一般の町人百姓は如何なる教育を受けたかと云へば、極めて卑近な實語教とか庭訓往來とか又加減乘除の九々等を學んだに過ぎない、從つて高尚な漢學教育を受けた武士は、理想も高く見識もあつたものであるが、百姓町人は通俗な手習に過ぎなかつたので、概して無學者が多かつたのである、然るに今は四民平等となり、貴賤貧富の差別なく、悉く教育を受くることゝなり、乃ち岩崎三井の息子も九尺二間の長屋の息子も、皆同一の教育を受くるといふ有樣であるから、其の多數の青年中の品性の劣等な、學問の出來ない青年のあるのは、蓋し止むを得ないことである、故に今の一般の青年と昔の少數なる武士階級の青年とを比較して彼れ是れと非難するは、當を得ないことである。

現今でも高等教育を受けた青年の中には、昔の青年に比較して毫も遜色のない

者が幾らもある、昔は少數でも宜いから、偉い者を出すといふ天才教育であつたが、今は多數の者を平均して啓發するといふ常識的教育となつて居るのである、昔の青年は良師を選ぶといふことに非常に苦心したもので、有名な熊澤蕃山の如きは中江藤樹の許へ行つて其の門人たらんことを請ひ願つたが許されず、三日間其の軒端を去らなかつたので、藤樹も其の熱誠に感じて、遂に門人にしたといふ程である、其他新井白石の木下順庵に於ける、林道春の藤原惺窩に於けるが如きは、皆その良師を擇んで學を修め、德を磨いたのである。

然るに現代青年の師弟關係は、全く亂れて仕舞つて、美はしい師弟の情誼に乏しいのは寒心の至りである、今の青年は自分の師匠を尊敬して居らぬ、學校の生徒の如きは、其の教師を觀ること、恰かも落語師か講談師かの如く、講義が下手だとか、解釋が拙劣であるとか、生徒として有るまじきことを口にして居る、こ

れは一面より觀れば、學科の制度が昔と異なり、多くの教師に接する爲であらうが、總て今の師弟の關係は亂れて居る、同時に教師も亦その子弟を愛して居らぬといふ嫌ひもあるのである。

要するに、青年は良師に接して自己の品性を陶冶しなければならない、昔の學問と今の學問とを比較して見ると、昔は心の學問を專一にしたが、現今は智識を得ることにのみ力を注いで居る、昔は讀む書籍その者が悉く精神修養を說いてゐるから、自然と之を實踐するやうになつたのである、修身齊家と言ひ、治國平天下と言ひ、人道の大義を教へたものである。

論語にも『其爲レ人也孝弟、而好レ犯レ上者鮮矣、不レ好レ犯レ上、而好レ作レ亂者、未之有レ也』といひて、『事レ君能致ニ其身一』といひて、忠孝主義を述べ、且つ仁義禮智信の教訓を敷衍しては、また同情心、廉耻心を喚起させるやうにし、又禮節を重んず

るやうにし、或は勤儉生活の貴ぶべきことを教へたものであるから、昔の青年は自然と身を修むると共に、常に天下國家の事を憂ひ、朴實にして廉耻を重んじ、信義を貴ぶといふ氣風が盛であつた、之に反して、現今の教育は智育を重んずるの結果、既に小學校の時代から多くの學科を學び、更に中學大學に進んで益々多くの智識を積むけれども、精神の修養を等閑に附して心の學問に力を盡さないから、青年の品性は大に憂ふべきものがある。

一體現代の青年は學問を修める目的を誤つて居る、論語にも『古之學者爲レ己、今之學者爲レ人』と云つて嘆じてあるが、移して以て今の時代に當て嵌めることが出來る、今の青年は唯學問の爲に學問をして居るのである、初より確然たる目的なく漠然と學問する結果、實際社會に出てから、我は何の爲に學びしやといふが如き疑惑に襲はれる青年が往々にしてある、學問すれば誰でも皆偉い者になれる、

といふ一種の迷信の爲に、自己の境遇生活狀態をも顧みないで、分不相應の學問をする結果、後悔するが如きことがあるのである、故に一般の青年は、自己の資力に應じて小學校を卒業すると、それぞれの專門教育に投じて實際的技術を修むべきである、また高等の教育を受くる者も、尙だ中學時代に於て、將來は如何なる專門學科を修むべきかといふ、確然たる目的を定むることが必要である、淺薄なる虛榮心の爲めに修學の法を誤らば、是れ實に青年の一身を誤るのみならず國家元氣の衰退を招く基となるのである。

◎偉人と其の母

婦人は彼の封建時代に於けるが如く、無教育にして寧ろ侮蔑的に取扱つて置けば宜しいであらう、それとも相當な教育を施し、修身齊家の道を教へねばならぬ

であらうか之は言はずとも知れ切つた問題で、教育は縱ひ女子だからとて、決して疎かにすることは出來ないのである、それに就て余は先づ婦人の天職たる子供の育成といふことに關して、少しく考慮して見る必要があらうと思ふ。

凡そ婦人と其の子供とは如何なる關係を持つて居るものであるかと云ふに、之を統計的に研究して見れば、善良なる婦人の腹から善良なる子供が多く生れ、優れた婦人の教育に因つて優秀な人材が出來るものである、その最も適切な例は彼の孟子の母の如き、ワシントンの母の如き即ち其れであるが、我國に於ても楠正行の母、中江藤樹の母の如き、亦皆賢母として人に知らるゝものであつた、近くは伊藤公、桂公の母堂の如きも賢母であつたと聞いて居る、兎に角優秀の人材は、其の家庭に於て賢明なる母親に撫育された例は非常に多い、偉人の生れ賢哲の世に出づるは婦德に因る所が多いと云ふことは、獨り余一家の言では無いので

ある、して見れば婦人を教育して其の智能を啓發し婦德を養成せしむるは、獨り教育された婦人一人の爲のみならず、間接には善良なる國民を養成する素因となる譯であるから、女子教育は決して忽諸に附することが出來ないものであるといふことに成るのである、然り矣、女子教育の重んずべき所以は未だそれのみにては盡きない、余は更に女子教育の必要なる理由を次に述べて見やうと思ふ。

明治以前の日本の女子教育は、專ら其の教育を支那思想に取つたものであつた然るに支那の女子に對する思想は消極的方針で、女子は貞操なれ、從順なれ、緻密なれ、優美なれ、忍耐なれと教へたが、此く精神的に教育することに重きを置いたにも拘はらず、智慧とか學問とか學理とかいふ方面に向つての智識に就ては奬めも教へもしなかつた、幕府時代の日本の女子も主として此の思想の下に教育されたもので、貝原益軒の『女大學』は其の時代に於ける唯一最上の教科書であ

つた、乃ち智の方は一切閑却され、消極的に自己を愼むことばかり重きを置いたものである、而して左樣いふ教育をされて來た婦人が今日の社會の大部分を占めて居る、明治時代になつてから女子教育も進歩したとはいへ、未だそれら教育を受けた婦人の勢力は微々たるもので、社會に於ける婦人の實體は『女大學』以上に出ることの出來ぬものと言ふも、敢て過言では無からうと思ふ、故に今日の社會に婦人教育が盛んであるとは謂つても、尙ほ未だ充分その效果を社會に認識せしむるには至らぬ、謂はゞ女子教育の過渡期であるから、その道に携はる者は其の可否を能く論斷し講究しなくてはならぬでは無いか、況んや昔の『腹は借りもの』といふ樣なことは口にすべからざる今日、又言うてはならぬ今日とすれば、女子は全く昔日の如く侮蔑視、嘲弄視することは出來ないことゝ考へられる。

婦人に對する態度を耶蘇教的に論じて云々することは姑く別とするも、人間の

眞正なる道義心に訴へて、女子を道具視して善いものであらうか、人類社會に於て男子が重んずべきものとすれば、女子も矢張社會を組織する上に共の一半を負うて立つ者だから、男子同様重んずべき者ではなからうか、既に支那の先哲も、『男女室に居るは大倫なり』と云うてある、言ふ迄もなく女子も社會の一員、國家の一分子である、果して然らば女子に對する舊來の侮蔑的觀念を除却し、女子も男子同様國民としての才能智德を與へ、倶に共に相助けて事を爲さしめたならば、從來五千萬の國民中二千五百萬人しか用を爲さなかつた者が、更に二千五百萬人を活用せしめる事となるでは無いか、是れ大に婦人教育を興さねばならぬといふ根源論である。

◎其罪果して孰れに在りや

師弟間の關係をして、情誼を厚くし、相親しむの念慮を強くあらせたいと思ふ地方の學校に於ては何うか知らぬが、私が聞及ぶ東京の中邊の學校に於ては、頗る此の師弟の關係が薄い、殆んど師と弟子とが、悪い例を言はうならば、寄席に出る落語を聽きに往つた多數の聽衆の如く見受けられる、あの人の講義は面白くないとか、あの人は時間が長いとか、甚しきは悪い癖を見付けて、之を批評すると聞及ぶ、尤も昔とても師弟の間の情愛が總て密だとは言へぬけれども、試みに孔子は三千の弟子があつた、是等が皆能く顔を知り、皆能く談話した人ではあるまい、併し其中で六藝に通ずるものが七十二人あつた、是等の人々は常に孔子と談話して居つたやうに見える、七十三人は全く孔子の人格に感化されたやうに見える、斯の如き師弟を例として論ずるも餘り過當であらうが、また今日の支那を見ると、左まで模範ともされない、併し今日の支那が悪いからとて、孔子の德が

變遷する譯はない、支那が後に惡いからとて孔子を輕んぜぬでも宜い、支那が善いからとても桀紂を重んずる譯には往かない、故に孔子が主として子弟を導いた有樣は、誠に師たり弟子たる間柄が極く善いと思ふ、斯の如き有樣を今日求める譯には往かぬけれども、德川時代に於ても師弟間の感化力は强かつた、其の情誼が切實であつたといふことは、試みに一例を言はんか、熊澤蕃山が中江藤樹に師事した有樣などで分かる、蕃山はあれ程氣位の高い人であつて、謂ゆる威武に屈せず、富貴に蕩せずといふ、天下の諸侯を物の數ともせず、備前侯に仕へたが、師として敬せられたから、政を施した位の見識のあつた人だが、中江藤樹に向つては眞に子供のやうになつて、三日忍んでさうして弟子たることを得た、其の師弟間の情愛の深かつたのは、蓋し中江藤樹の德望が人を感化せしめたものと思ふ、又新井白石といふ人も剛情で、智略といひ、才能といひ、また氣象といひ、

實に稀有の人である、それが終身木下順庵には服從して居たといふことである、近世佐藤一齋といふ人も、能く弟子を感化せしめた、また廣瀨淡窓も同樣である、私の知つてるのは漢學の先生だけだけれども、子弟といふ關係が、昔風では一身を抽んでて親むといふのである、然るに今の子弟の間は、殆んど寄席を聽きに往つた有樣をなして居るといふことは、私は滿足の風習でないと恐れて居る、畢竟これは師匠たる人が惡いと云はなければならぬ、德望、才能、學問、人格がモウ一層進まなければ、其の子弟をして敬虔の念を起さしむることは出來ぬ、そこには師たる人に缺點があると謂はねばならぬ。

併し弟子の心得方も甚だ惡いと思ふ、一般の風習が、其の師に對して敬ふこと念が少い、他の國々の有樣はよく分かりませぬが、彼の英吉利などは如何も私は子弟の間の關係が、日本の今日のやうでは無いと思ふ、但し日本でも優れた教

育に從事した人が、猶ほ今私が述べた有樣とは言はぬ、或る方面には中江藤樹も木下順庵もあらうけれども、甚だ鮮い、過渡時代のため、不幸にして俄出來の先生が澤山あるから、自ら斯る弊害を惹起したのだと辯解すれば、辯疎の言葉があるけれども、苟くも人に教授する以上は、其人自身が自ら省みて餘程注意して貰ひたいものであると同時に、また一方より之を十分敬ふこいふ心を以て、師弟の間に情愛を以てしたいと思ふ、若し諸君の從事なさる學校の教員諸氏にも、生徒をして常に之に接觸せしむるに、此く心掛けられたら、其の風儀を良くするといふことが、悉くは屆かないまでも、惡いのを防ぐといふだけ位のことは、必ず爲し得られるものであらうと、斯う思ふのである。

◎理論より實際

世間一般に、教育のやり方を見ると――私は殊に今の中等教育なるものが其弊が甚しいと思ふ――單に智識を授けるといふことにのみ重きを置き過ぎて居る換言すれば、德育の方面が缺けて居る、確かに缺乏して居る、又一方に學生の氣風を見ると、昔の青年の氣風と違つて、今一と呼吸といふ勇氣と努力、それから自覺とが缺けて居る、此く言へばとて、自分の如き昔者が決して自慢高慢をする譯ではないが、何しろ當時の教育は學課の科目が多い、あれもこれもといふ有樣であるので、その多い科目の修得にのみ逐はれて、維れ日も足らずこいふ風であつて見れば、從つて他を顧みる遑もない勘定で、人格、常識等の修養に心を注ぐことの出來ぬのも自然の數で、返すがへすも遺憾千萬な譯である、現に處世の人となつてる人々は兎も角として、是から世間に出て大に奮勵努力、國家の爲に盡さうと思はれる方々は、此邊に能く〳〵心を用ゐて貰ひたい。

所で、自分に最も關係の深い實業方面の教育に就て見るに、その昔にありては實業教育と名付くべき程のものはなかつたが、維新以後になつても、明治十四五年の頃までは、此の方面には些の進歩を見ることは出來なかつた、商業學校の如きも、其の發達は僅々この二十年程の間のことである。

一體文明の進歩といふことは政治、經濟、軍事、商工業、學藝等が悉く進んで、其所に始めて見ることが出來るので、其中の何れか一が缺如しても、完全なる發達、文明の進歩のあるものではない、然るに日本では、其の文明の一大要素である商工業が、久しい間閑却して顧みられずにあつた、翻つて歐洲の諸列强に見るに、他の方面の事も勿論進歩して居るが、其中でも取りわけ進んで居るのが實業である。即ち商工業である我國に於ても近來は實業教育に世人が注意するやうになつて、進歩發達はして來たが、さて惜いかな、其の教育の方法はと云ふ

と、前述の如く其他の教育の方法と同じく、せくが儘に、急ぐが儘に、理智の一方にのみ傾き、規律であるとか、人格であるとか、德義であるとか云ふことは、毫も顧みられない、機運の趨く所、餘儀ない次第と言はゞ言へ實に嘆ずべきことである、是を軍人社會に見ると、其の教育法の然らしむる所か、或は軍事とかいふ其職が、既に其の性質を養ふものか、其邊の所は解らぬが、一般的統一、規律服務、命令等のことが、整然と嚴格に行はれて居るやうであるのは、實に結構なことで、立派な人格な士を見受けるものも非常に賴もしい次第である。

實業界に立つ者は、前述の諸性質を十分に備へた上に、尙ほ一つ尊ばなければならぬ一大事が殘つて居る、それは自由といふことで、實業の方では、軍事上の事務のやうに、一々上官の命令を俟つてるやうでは、兎角好機を逸し易いので何事も命令を受けてやると云ふ具合では、一寸發達といふことは六ケ敷いのであ

る、その結果、唯智へ、智へと傾いて行つて唯もう己が利益々々とのみ逐うて孟子の謂ゆる『上下交も利を征りて饜かず、國危し』と云ふやうな狀態に陷つては、是れのみ氣遣はれるので、どうがなして斯ういふ事に立ち至らぬやうと、竊かに手近い實業教育に於ても、智育と德育とを併行せしめて行きたいものと、及ばずながらも、多年努めて居る次第である。

◎孝らしからぬ孝

德川幕府の中葉より行はれはじめ、神儒佛三道の精神を合せ平易なる言葉を用ひ、極卑近にして而かも通俗な譬喩を擧げて、實踐道德の鼓吹に力めたものに、『心學』といふものがある、八代將軍吉宗公の頃、石田梅巖初めて之を唱へ、かの有名な鳩翁道話なども、此の派の手に成つたものであるが、梅巖の門下よりは

手島堵庵、中澤道二などの名士出で、この兩人の力により、心學は普及せらるゝやうになつたものである。

私は曾て此の兩人の中の中澤道二翁の筆になつた道二翁道話と題せらるゝ一書を讀んだことがある、その中に載つてる近江の孝子と信濃の孝子とに就ての話は未だに忘れ得ざる程意味のある面白いもので、確か孝子修行といふ題目であつたかの如くに記憶して居る。

その名は何と云つたか、今明確に覺えて居らぬが、近江の國に一人の有名な孝子があつた、『夫れ孝は天下の大本なり、百行の依て生ずる所』と心得て、日夜その及ばざるを唯惟れ恐れて居つたが、信濃の國に亦有名なる孝子あると聞き及び親しく其の孝子に面會して、如何にせば最善の孝を親に盡すことの出來るものか一つ問ひ訊して試みたいものだ、との志を懷き、遙々と野越え山越えて、夏な

ほ涼しき信濃の國まで、態々近江の國から孝行修行に出掛けたのである。

漸々にして孝子の家を尋ね當て、其家の敷居を跨いだのは、正午過であつたが家の中には唯一人の老母が在るだけで、實に寂しいものである『御子息は』と尋ねると『山へ仕事に行つてるから』このことに、近江の孝子は委細來意を留守居の老母まで申し述べると、『夕刻には必ず歸らうから、兎に角上つて御待ち下さるやうに』と勸められたので、遠慮なく座敷に上つて待つてると、果して夕暮方に至れば信濃の孝子だと評判の高い子息殿が、山で採つた薪を一杯背負つて歸つて來られた、そこで近江の孝子は、此所ぞ參考のために大に見て置くべき所だらうと心得て、奥の室から様子を窺つて居ると、信濃の孝子は、薪を背負つたまゝで縁に腰乎と腰を掛け、荷物が重くて仕様がないから、手傳つて卸して呉れろと、老母に手傳はして居る模様である、近江の孝子は先づ意外の感に打たれて、猶ほ

窺つてるとも知らず、今度は足が泥で汚れてるから淨水を持つて來て呉れの、やれ足を拭うて呉れのと、様々な勝手な注文ばかりを老母にする、然るに老母は如何にも悦ばしさうに嬉々として、信濃の孝子が言ふまゝに能く伜の世話をして遣るので、近江の孝子は誠に不思議のこともあればあるものと驚いてるうちに、信濃の孝子は足も綺麗になつて爐邊に坐つたが、今度は又あらうことか有るまいことか、足を伸して、大分疲れたから揉んで呉れと老母に頼むらしい模様である、それでも老母は嫌な顔一つせず揉んで行つてるうちに、はる〳〵近江からの御客様があつて、奥の一ト間に通してある由を信濃の孝子に語ると、そんならば御逢ひしやうとて座を起ち、近江の孝子が待つてる室にノコ〳〵やつて來た。

近江の孝子は一禮の後、信濃の孝子に委細來意を告げて、孝行修行の爲に來れる一部始終を物語り、彼是れ話し込むうち早や夕飯の時刻にもなつたので、信濃

の孝子は晩飯の支度をして客人に出すやうにと老母に頼んだ様子であつたが、愈愈膳が出るまで、信濃の孝子は別に母の手傳をしてやる模様もなく、膳が出てからも平然として母に給仕させるのみか、やれ御汁が鹹くて困るとか、御飯の加減が何うであるとか、と老母に小言ばかりを言ふ、そこで近江の孝子も遂に見かねて、『私は貴公が天下に名高い孝子だと承つて、はる〴〵近江より孝行修行の爲め罷り出たものであるが、先刻よりの様子を窺ふに、實に以て意外千萬の事ばかり、毫も御老母を勞はらるゝ模様のなきのみか、剩へ老母を叱らせらるゝとは何事ぞ、貴公の如きは孝子どころか、不孝の甚しきものであらうぞ』と勵聲一番開き直つて詰責に及んだのである、之に對する信濃の孝子の答辯がまた至極面白い。

『孝行々々と、如何にも孝行は百行の基たるに相違ないが、孝行をしやうとして

の孝行は眞實の孝行とは言はれぬ、孝行ならぬ孝行が眞實の孝行である、私が年老いたる母に種々と頼んで、足を揉ませたりするまでに致し、御汁や御飯の小言を曰つたりするのも、母は子息が山仕事から歸つて來るのを見れば、定めし疲れてることだらうと思ひ、「さぞ疲れたらう」と親切に優しくして下さるので、その親切を無にせぬやうにと、足を伸して揉んで貰ひ、また客人を饗應すに就ては、定めし不行屆で息子が不滿足だらうと思うて下さるものと察するから、その親切を無にせぬ爲め、御飯や御汁の小言までも曰うたりするのである、何でも自然のまゝに任せて、母の思ひ通りにして貰ふところが、或は世間に、私を孝子々々と言ひ囃して下さる所以であらうか』といふのが、信州の孝子の答であつた、これを聞いて近江の孝子も翻然として大に悟り、孝の大本は何事にも強ひて無理をせず、自然のまゝに任せる所にある、孝行のために孝行を力めて來た我身には、ま

だまだ到らぬ點があつたのだと氣付くに至つた、と說いた所に道二翁道話の孝行修行の敎訓があるのである。

◎人物過剩の一大原因

經濟界に需要供給の原則がある如く、實社會に投じて活動しつゝある人間にも亦此の原則が應用されるやうである、言ふまでもなく、社會に於ける事業には一定の範圍があつて、使ふだけの人物を雇ひ入れるゝ、それ以上は不必要になる、然るに一方人物は年々歲々澤山の學校で養成するから、未だ完全に發達せぬ我が實業界には、迚も夫等の人々を滿足させるやうに使ひ切ることは不可能である、殊に今日の時代は高等敎育を受けた人物の供給が過多になつて居る傾が見える、學生は一般に高等の敎育を受けて、高尙の事業に從事したいとの希望を持つてか

かるから、忽ち其所に供給過多を生じなければ止まぬことに爲つて仕舞ふ、學生が此の如き希望を懷くのは、個人として、勿論嘉すべき心掛であるが、これを一般社會から觀、或は國家的に打算したら如何であらうか、余は必ずしも喜ぶべき現象として迎へることは出來ないやうに思はれる、要するに、社會は千篇一律のものでは無い、從つて之に要する人物には色々の種類が必要で、高ければ一會社の社長たる人物、卑くければ使丁たり車夫たる人物も必要である、人を使役する側の人は少數なるに反し、人に使役される人は無限の需要がある、左れば學生が此の需要多き、人に使役さるゝ側の人物たらんと志しさへすれば、今日の社會と雖も未だ人物に過剩を生ずるやうな事はあるまいと考へる、然るに今日の學生の一般は、其の少數しか必要とされない、人を使役する側の人物たらんと志して居る、つまり學問して高尙な理窟を知つて來たから、馬鹿らしくて人の下などに使

はれることは出來ないやうになつて仕舞つて居る、同時に教育の方針も亦若干その意義を取り違へ、無暗に詰込主義の智識教育で能事足れりとするから、同一類型の人物ばかり出來上り、精神修養を閑却した悲しさには、人に屈するといふことを知らぬので、徒らに氣位ばかり高くなつて行くのだ、此の如くんば人物の供給過剰も寧ろ當然のことではあるまいか。

今更、寺小屋時代の教育を例に引いて論ずる譯ではないが、人物養成の點は不完全ながらも昔の方が巧くいつて居た、今日に比較すれば教育の方法などは極めて簡單なもので、教科書と言つた所で、高尚なのが四書五經に八大家文位が關の山であつたが、それに依つて養成された人物は、決して同一類型の人物ばかりでは無かつた、それは勿論教育の方針が全然異つて居たからではあらうけれども、學生は各々其の長ずる所に向うて進み、十人十色の人物となつて現はれたのであ

つた、例へば、秀才はどん〳〵上達して高尚な仕事に向うたが、愚鈍の者は非望を懷かずに下賤の仕事に安んじて行くといふ風であつたから、人物の應用に困るといふやうな心配は少かつた、然るに今日では教育の方法は極めて宜いが、其の精神を穿き違へて居る爲に、學生は自己の才不才、適不適をも辨へず、彼も人なり我も人なり、彼と同一の教育を受けた以上、彼のやる位のことは自分にもやれるとの自負心を起し、自ら卑しい仕事に甘んずる者が少いといふ傾向である、これ昔の教育が百人中一人の秀才を出したに反し、今日は九十九人の普通的人物を造るといふ教育法の長所ではあるが、遺憾ながら其の精神を誤つたので、遂に現在の如く中流以上の人物の供給過剰を見るの結果を齎らしたのである、併し同じ教育の方針を執りつゝある、歐米先進國の有樣を見るに、教育に因つて斯る弊害を生ずることは少いやうに思ふ、殊に英國の如きは我國に於ける現時の狀態と

は大に違うて、十分なる常識の發達に意を用ゐ、人格ある人物を造るといふ點に注意して居るやうに見える、固より教育のことに關して其の多くを知らぬ余の如き者の容易に容喙さるべき問題ではないが、大體から觀て今日のやうな結果を得る教育は、餘り完全なるものであるとは謂はれまいと思ふ。

日に其の亡き所を知り、月に其の能くする所を忘るゝことなきは、學を好むと謂ふべきなり。

學ぶに暇あらずと謂ふ者は、暇ありと雖も亦學ぶこと能はず。

論語　准南子

成敗と運命

◎それ唯忠恕のみ

凡そ業は勤むるに精しく、嬉むに荒むといふが、萬事が卽ちそれである、若し大なる趣味と大なる感興とを以て事業を迎へられたならば、假令如何に忙しく、又如何程煩はしくとも、倦怠若くは厭忌といふが如き、自己が苦痛を感ずる氣分の生ずべき理由はない、若し又これに反して、全然沒趣味を以てイヤ〳〵ながら事務に從ふといふ場合には、必ず先づ倦怠を生じ、次で厭忌を生じ、次で不平を生じ、最後には自分が其の職を拋たねばならぬやうになるは、蓋し數の自然である、前者は精神潑溂として愉快の中に越味なるものを發見し、この趣味よりして

無限の感興を惹起し、感興は軈て事業の展開を來たすことに至るものである、而して事業の展開は即ち社會に公益を與ふることになる、後者は精神が萎縮して、怏々鬱々、倦怠より困憊を釀し、困憊はやがて其身の滅亡を意味することになる

假りに前者と後者とを對照して、その孰れを執るかを諸氏に試問したならば、前者を執ることの最も賢しこく、後者を執ることの最も愚なるを明答せらるることであらう、又よく世人が口癖のやうに運の善惡こいふことを說くが、抑も人生の運こいふものは十中の一二、或は豫定があるかも知れぬ、併しながら假令これが豫定なりとして見た所が、自ら努力して運なるものを開拓せねば、決してこれを把持するといふことは不可能である、愉快に事務を執りつゝ一方に大なる災厄を招致すると、其はじめ啻に天淵のみであるまい、諸氏も亦必ず其の一方を捨てゝ他の一方を把持せられんことを熱望せらるゝであらう、而して諸氏が銘々其の事

業上に大なる趣味と大なる感興とを有たるゝと同時に、其の內容の充實を期さねばならぬ、況して救濟事業の如きは、其の性質上注意の上にも猶ほ一層の注意を拂ひ、務めて其の內容の豐富ならんことに於て遺憾なきを期すべきである、されば云うて其の內容にのみ腐心して形式を疎外視することも宜しくない、凡そ各種の事業として、內外共に權衡を缺いてはならぬ、要するに、單に其の表面を衍はんが爲め、徒らに形式にのみ囚はるゝと云ふことは、最も注意してこれを避けねばならぬ。

更に言ふまでもなきことながら、本院（東京市養育院）には、現に（大正四年一月）二千五六百人の窮民が收容してある、其の中には除外例として、善因却つて惡果を結びて窮民たり、行旅病人たるものなきにあらざれども、其の多くは謂ゆる自業自得の輩である、併しながら彼等を自業自得の者なりとして、同情を以